
をくれ」 悪魔「よし、貴様の残りの寿命68年と、5ヶ月と14日を引き換え、1時間5分

やもり

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士「私の命と引き換えに最強の力をくれ」 悪魔「よし、貴様の残りの寿命68年と、5ヶ月と14日を引き換え、1時間5分11秒の間、最強の力を与えよう」

【Nコード】

N1905S

【作者名】

やもり

【あらすじ】

天界人の侵略により滅び行く人間界。自分の国を焼き尽くされ、絶望に打ちひしがれる一人の騎士、ファルコン・ベンザ卿。そんな彼の前に突如悪魔が現れ、寿命と引き換えに最強の力を1時間だけ与えようと話を持ちかけてくる……

パロディーありのドタバタファンタジー!?

残りの時間は時間は有効に・・・（前書き）

時の流れというものは、曖昧で不条理である。そしていかなる権力者もこれを塞き止めることはできない……神であつても。

残りの時間は時間は有効に・・・

皆さん初めまして、私の名前はベンザ……ファルコン・ベンザ卿です。決して便座じゃありません……ちよつと失礼。

ベンザ卿「すいません悪魔さん、この記録装置しっかり動いています」

悪魔「バツチリ、音声も完璧」

ベンザ卿「おお、すばらしい！！やっぱSONY製は高性能だ」

う、うん………すいません。改めまして、私はファルコン・ベンザ卿。かつてこの場所にあった王国、セリベルア王国で騎士をしていました。しかし王国は奴らの手によって滅ぼされました。

悪魔「5分経過」

ベンザ卿「えええっ、まだ名前しか説明してない！！」

悪魔「じゃあ、後で時代背景とかめんどくさい説明は編集で後から入れとくは」

ベンザ卿「本当にいいんですか？」

悪魔「時間がないですよ！！ 後のことは私に任せて！！ 自分の時間を有効に使ってください」

ベンザ卿「分かりました……じゃあまず今攻撃されている隣の国を助けます」

悪魔「了解、かつこよく撮りますよ」

創生の神アースはこの世に7つの世界を創り上げた。天界、人間界、魔界、冥界、獣人界、魔法界、霊界などである。アースは自らの命はいつか尽きることを知っていた。自分が命尽きれば、争いと混乱が起きる。そこでアースは優秀な種を天界と冥界に振り分け、その他の世界の統治を彼ら優良種に任せた。天界は一番巨大な、人間界を管理し、冥界はその他4つの世界を管理した。これでアース亡き後も世界は平穏であると思われた……

アースがこの世を去ってから1000年の時が流れた。世界は変わらず平穏だった。しかしこの時天界では深刻な問題が発生していたのだ。

資源の枯渇である。優良種である天界人の技術の進歩は凄まじく、それに伴い大量の資源を消費したのだ。

天界では何度も議会が開かれこの問題の解決方法を模索した。

そして彼らが出した結論は、人間界への進出だった。彼ら天界人はさらに100年の歳月をかけ、人間界に時空を超える巨大な橋を建設した。

マテンロウ
摩天楼

人間界の人々は時空を超え、突如現れたその2つの塔をそう呼んだ。人々はその橋を見ると、口々に神様が地上に降臨なされると叫び、大騒ぎになった。しかし、その塔の間の空間から次々に現れた

のは、神様ではなく、大量の天界兵器で武装した天界人だった。

それからは一方的だった。ビーム砲や5mを超える人型天界兵器エンジェルに人間たちは、剣や小銃、大砲で立ち向かったがもちろん敵うはずなく。346あった国もいまや126にまで減ってしまい、4ヶ月もしない間に人間界の4割が天界の植民地となった。戦いに敗れ捕まった人たちは、奴隷として植民地で働かされ地獄の様な日々を過ごし、血の涙を流した。ファルコン・ベンザ卿もまた戦いに敗れた人の1人だった。ファルコンベンザ卿は東一帯を治めるセルベリア王国で、最強と呼ばれた騎士だった。

2日前の夜ことである。セルベリアの町の中に敵接近を知らせる鐘の音が響きベンザ卿は飛び起きた。急いで鎧を身につけ騎士団の配置についた時には敵は町のすぐ外にまで迫っていた。町を囲む城壁からは大砲による砲撃が行われて、虚空に轟音が響いている。ベンザ卿を含めた騎士団たちは門の前に整列し、攻撃の合図を待っていた。

刹那、整列する騎士たちの真ん中に城門から大砲が落ちてきた。鈍い音と共に地面に突き刺さる大砲。奇跡的にも死傷者出なかったが、地面に刺さるそれを見て騎士たち一斉に息を呑む。砲身が半分解けているのだ。

これは天界軍の中性子レーザー砲によるものだ。しかし技術的に大きく差のある人間たちが、それを理解できるはずも無く、人間たちからは鋼鉄を一瞬で溶かす『光の矢』として大いに恐れられていた。

「臆するな！！ 我々には勝利の女神がついている！！」

うろたえる騎士たちを見かねた騎士団長が、剣を抜きベンザ卿を

指し示した。女神と言われて、（私は男なのだが……）と兜の中で苦笑するベンザ卿だったが、この程度で士気が上がるならと、無言でランスを天高く突き上げた。それを見た騎士たちは大いに沸き立ち、手に持った武器をベンザ卿に見習い天高く突き出した。騎士たちの士気が最高潮に達した時、ラッパの音同時に城門の上から騎士たちに突撃の合図が送られた。

「突撃ー！！！！」

騎士団長の言葉で門から飛び出し、敵天界兵器に向かって突撃を仕掛ける騎士団。ベンザ卿は先頭に立ち天界兵器に攻撃を仕掛けようとした。

その時――

ベンザ卿の手前にエネルギー弾が着弾し、ベンザ卿を閃光が包みこむ。ベンザ卿が覚えていたのはここまでだった。気がつけば日が真上に上っており。その日差しは刃の如く地に突き刺していた。ベンザ卿泥の中から起き上がり、体中の泥と砂を叩き落とすと、町はどうなったかと辺りを見渡した。

しかし町が見当たらない。あるのはただの瓦礫の山だった。ベンザ卿は絶望で言葉を失った。自分が長年暮らした家も、何度も往復した大通りも、国王陛下が住まわれていた巨大な城もなにもかも無くなっていたのだ。ベンザ卿は悔しさで両手のこぶしを地に叩き付け、涙を流す。そんな時だった。途方にくれているベンザ卿に彼が話しかけのだ。

「力がほしいですか？」

真っ赤な顔に一本角、ベンザ卿は一瞬でそれが悪魔であることを理解した。しかし今の彼に話す相手が悪魔だろうが神だろうがどうでもよかった。

「ああ欲しい、私は騎士でありながら誰も守れなかった。侵略者から全てを守る力が欲しい」

「その望み、叶えましょう」

ベンザ卿は耳を疑う。

「なんだって!!」

「その代わり、あなたの命をいただきます。命と引き換えに最強の力をお譲りしよう」

「いいだろう、なんでも持っていけ」

腹を括った表情で、ベンザ卿はそう言った。もう彼に残されたものの命以外何もなかったからだ。それを聞いた悪魔は笑顔になり、電卓を取り出しなにやら計算を始め、そして計算を終えた悪魔はさらに笑顔になった。

「それでは、ベンザ卿が今後生きるはずだった。残りの寿命58年と、5ヶ月と14日、3時間45分13秒と引き換えに、1時間、あなたに最強の力を与えましょう」

「1時間だけか!!」

ベンザ卿は驚きで思わず大声をだした。

「へへへ、嫌ならいいんですぜ」

足元をみているのだろう。悪魔はいやらしい笑みを浮かべている。

「わかった。別の悪魔を探す」

そう言った瞬間悪魔の態度が豹変した。

「ちょー！！ わかりました、3分おまけしましょう」

額に薄っすら冷や汗をかいた悪魔は、妥協案を示した。しかしベンザ卿はこれ突っぱねる。

「7分だ」

「4分でどうです旦那？」

「6分」

「ええい！！ 赤字覚悟の5分でどうです？」

冷や汗で衣装を濡らした悪魔が計算機をベンザ卿に向けなおす。しかしそれでもベンザ卿は首を縦に振らなかった。

「もう一押し」

「5分11秒！！ これ以上は無理です！！」

全身が汗でずぶ濡れになった悪魔を見てベンザ卿は薄い笑みを浮かべた。

「わかった。お前と契約しよう」

こうしてファルコンベンザ卿は最強の力を手に入れたのだった。

残りの時間は時間は有効に・・・（後書き）

どうも

ファンタジー初挑戦です

意見、感想（特に悪いところ）
心からおまちしています。

！！
まだまだ未熟者ですが、がんばりますのでどうか応援してください

7／2文章ををそこそこ変更

悪魔契約は慎重に・・・（前書き）

その日、卿は中二病の化身となった。

悪魔契約は慎重に・・・

悪魔は地面に巨大な魔方陣を描いた。契約の儀式に必要ならしい。

「契約する前にお願いがあります」

地面に魔方陣を描きながら、ふと悪魔が声をかけた。

「ん？」

腕を組み、魔方陣が描かれるのをしげしげと観察していたベンザ卿は、半ば上の空で返事をした。

「実は私、映画監督になるのが夢なんです」

少し悪魔は興奮した様子で、自分の黒いコートのポケットを探り始める。

「ほう、それで？」

「はい、実は人間の活躍をドキュメンタリー映画にしたいくてカメラもってきたんです。撮影の許可をもらえませんか？」

「そんなことなら全然かまわない、かっこよく撮ってくれ」

意外な悪魔の頼みごとに驚きながらも、ベンザ卿は快く撮影を許可した。

「ありがとうございます」

それを聞いた悪魔は嬉しそうにカメラを取り出し、レンズを磨い

た。少しの間カメラの調整を行っていた悪魔だが、自分の目的を思い出して魔方阵に最後の記号を記入する。

「ところで質問があるのだが？」

完成した魔方阵を横目にベンザ卿は手を上げた。

「なんでしょう？」

「最強の力というのは、具体的にはどんな力かね？」

ベンザ卿が疑問に思うのも無理は無い、すべての寿命と引き換えに受け取る力なのだ、少しでも情報がほしいところだ。

「はあ、大体のことができます。14歳ぐらいの少年があこがれている大体の能力が使えます」

「目からビーム」

ベンザ卿はとっさに思いついた能力を言った。

「できます」

ほう、と頷きながらさらに難題を考える。

「手からエネルギー弾」

「初期装備です」

初期装備と聞いて、気分がよくなったベンザ卿は思考をめぐらす。すると昔読んだ鋼で、錬金術な漫画を思い出した。

「指パッチンで炎を出す」

「なめてもらっちゃ困ります」

これを聞いたベンザ卿は、まさかと思いつつ自分の希望を述べる。

「空をマッハで飛行」

「できないと言うとでも？」

ここまでくればと、ベンザ卿は確信を持って質問した。

「その幻想を左手でぶち壊す」

「右手でも可能です」

両者は顔を見合わせ、笑みを浮かべた。

「完璧だな」

「ハイ、完璧です」

そしてベンザ卿は指を切って、血を地面に描かれた魔方陣に1滴落とした。悪魔とベンザ卿は契約を交わした瞬間だった。

悪魔契約は慎重に・・・（後書き）

作品向上のために
感想をおまちしています。

登場人物紹介

ファルコン・ベンザ卿（37歳）

ゼルベリア王国の元騎士

特徴…すぐに女性を怒らせる

趣味…模型製作

特技；剣術

悪魔（??）

赤い彗星の異名を持つ悪魔

特徴…押しに弱い

趣味；映画鑑賞

特技；撮影

レギア卿（29歳）

レオパルド王国の騎士

特徴…恐妻家

趣味…釣り

特技…土下座、剣術

シャル・ディアロ・マラサイ（外見年齢26歳）（実年260歳）

冥界人…女性

特徴…美人

趣味…音楽鑑賞、乗馬

特技；魔法

ジョン・マッケンバウアー（52歳）

天界人…天界軍総司令官

特徴…ドS

趣味…乗馬（別の意味で）

特技…鞭打ち

ビンセント・ノア（29歳）

天界人…天界軍大佐、司令補佐官

特徴…ベジタリアン

趣味…家庭菜園

特技…クレール射撃

登場人物紹介（後書き）

年齢の表現を変更しました2011・9／4

白銀の鬼神（前書き）

ベンザ卿は侵略をうけている隣国を救うべく、大空に飛び立った。

白銀の鬼神

「もうだめだ……」

レギア卿はそう呟いた。レオパルド王国守備部隊は壊滅寸前だった。隣国のセルベリア王国が滅ぼされたことは伝わっていたが、まさかこんなに早く天界人が進行してくるとは予想もしていなかったのだ。凄まじい光と共に外壁の砲台が1つ1つ蒸発させられていく。敵の機械人形によるビーム攻撃によるものだった。

「外壁の砲台は全滅です！！　もう機械人形に対抗する手段が……」

兵士の一人が大声で叫んだ。その瞬間外壁に大きな衝撃が伝わり大気を振動させる。

「卿！！　機械人形が外壁を上ってきます。ここからお逃げください！！！」

兵士がそう警告した時にはすでに遅く、外壁の上に3機为天界兵器が同時に着地した。

「ばかな！！　16mの外壁を一瞬で！！！」

レギア卿は剣に手をかける。しかしこんなものが彼らに通用しないことは誰の目にも明らかだった。天界兵器は卿や周囲の兵士にビーム砲の銃口を向けられ、レギア卿は自分の死を覚悟した。

その時だった。

軽快な指パッチンの音と共に、卿の目の前にいた天界兵器が炎上をはじめた。そして同時に、空から銀色に輝く甲冑を身に着けた騎士が外壁に降り立ったのだ。

「お久しぶりですな、レギア卿」

銀に輝く騎士は、指揮官らしき騎士に向かってそう言った。

「その声は……ベンザ卿!! 生きておられたのですか!?!」

ベンザ卿は両手を体の正面に突き出し同時に両手の指をパッチンさせる。のこり2機为天界兵器も同時に炎上した。

「ベンザ卿……どうなっているんです!?!」

レギア卿はかなり混乱している様子でベンザ卿に駆け寄った。無理も無いだろう死んだと思っていた友人が空から現れ、天界兵器を指パッチンで破壊したのだから。

「レギア卿、私は悪魔と契約を結んだのです」

「なん……ですと」

驚くと同時にレギア卿は腰の剣に手をかけた。この世界では悪魔契約は禁忌中の禁忌。もし悪魔契約が発覚すれば即斬首刑が一般的だったのだ。

「やめてくださいレギア卿、これしか方法が無かったです。私は自分の残りの寿命約68年と引き換えに、この力を手に入れました。しかしこの力を使えるのはあと50分なのです」

「たったの50分!？」

「はい、私はその50分の間にマテンロウを陥落さるつもりです」

「正気ですかベンザ卿!？」

レギア卿は大声を上げた。マテンロウ……人間界最大の天界軍基地があり、天界と人間界を唯一結ぶ橋がある場所。それを50分で陥落させるとベンザ卿は自信に満ちた声で言い切った。

「いいですかベンザ卿!! あなたはマテンロウの戦力をご存じない!!! 50分でマテンロウを陥落させるのは不可能です自殺行爲です!!」

「可能かどうかは問題じゃないのです!! どうせ私はあと50分……いや49分しか生きられない、私は自分の人生に悔いがないように死にたい!! すべての人間を天界人という呪縛から解放させたい!! 私は一度何も守れなかった、しかし今なら力がある!! これは最後のチャンスなんですよ……」

ベンザ卿は言葉を止めた……その言葉を聴いてレギア卿は唇を噛締め、言おうとしていた言葉を飲み込こんだ。
ベンザ卿の決心は揺るがないと悟ったのだろう。

「すまないレギア卿、もう少し話して居たかったが私には時間がない」

そう言って外壁の外に向かうベンザ卿。レギア卿は腰の剣をベンザ卿に向かって投げた。

「武運を祈ります」

剣を受け取ったベンザ卿は足を止めた、しかし振り返ることなく、そのまま外壁の外に飛び降りたのだった。

一方天界軍はパニック状態に陥っていた。

「本部！！ 本部！！ 応答してください！！ こちら【ラミエル1】、先行していた【ウリエル1，2，3】が大破、繰り返す【ウリエル1，2，3】大破！！」

「【ラミエル1】面白くない冗談だ」

慌てた様子のパイロットの声を聞き、驚いた様子で司令部のオペレーターが応答した。本部のオペレーターが疑うのは無理もなかった。天界人が操る二足歩行型天界兵器は天界最高技術の結晶である。人間が使用する大砲では撃破はどこか傷すら付けられたことがなかったのだ。

「冗談じゃない！！ 何だあいつは……こっちに来るぞ！！」
【ラミエル2，3】攻撃、攻撃だ……うああああああっ……」

「どうした【ラミエル1】、応答しろ！！」
【ラミエル1】応答しろ！！」

オペレーターは無線に向けて怒鳴り声に近い怒声を上げたが、本部のメインモニターに映る赤い印が【ラミエル1】が撃墜されたことを示していた。現地で戦闘中の別機から撃墜が目視で確認された通信が入る。

「本部【ラミエル】チーム全滅！！　繰り返す【ラミエル】全滅！！」

「そんな馬鹿なことが……」

この前代未聞の事態に、オペレーターは一瞬思考が停止する。天界人からすれば、相手は数千年技術力が劣る原始人である。それらにエンジェルが撃墜されるなど、彼の想定外の範囲外であった。

「本部、増援を……このままでは全滅です。増援を、ぎゃああああ」「この野郎よくも隊長を……なんだこいつ、ビームが効かな……」

2機の通信が同時に受信されたかと思うと、同時に機体が消滅する。

「どうした【ラジエル】、【ラジエル】チーム応答しろ！！　……クソっ！！」

パイロットたちに適切な指示を送れぬまま、絶句するオペレーター。このままでは全滅に近いことを悟った彼は迷うことなく、ガラステースに覆われた赤いボタンを叩き割った。

天界軍駐屯基地に緊急事態を示すサイレンが鳴り響いた。基地内の滑走路では天界軍主力兵器である【エンジェル】の改良型【アーケンジェル】が、航空空母【スローンズ】に大急ぎで積み込まれていく。空母内のブリーフィングルームには、エリート中のエリートパイロットばかりが集められた。滑走路には【スローンズ】の他に【ケルビム】級空中戦艦が二隻、出撃準備をすませて待機している。このような前代未聞の大規模出撃に、兵士たちは皆首を傾げるばかりだった。

ビームセイバーを装備した【エンジェル】は、背中の高機動ブースターを使い高速でベンザ卿に斬りかかった。パイロットは勝利を確信し笑みを浮かべた。しかしその表情は一瞬で恐怖に変わった。ベンザ卿はビームセイバーを左手の人差し指と中指で挟んで受け止めていたのだ。

「そんな……在りえん!!」

ベンザ卿は残った右手で【エンジェル】の頭部装甲にでこピンを食らわす。金属の引き裂かれる音がした刹那【エンジェル】の頭部から胸部までの装甲が一気に消し飛び、中のパイロットの姿があらわになっていた。パイロットはなにが起きたのかを理解するのに時間がかかった。なにせ突然目の前のモニターが消えて、白銀の騎士が現れたのだから。

「ひいひい……おっ、お願い、こっ、殺さないで!! 娘がいるんだ」

「貴様たちがあざ笑いながら殺した人たちの中にも、娘がいた奴は大勢いただろうに!!」

ベンザ卿は怒りで声を震わせた。パイロットは突如目の前に現れた化け物に恐怖し、奥歯をガタガタ震わせている。ベンザ卿は邪魔だと言い放つと、パイロットをつまみ出し、胸から下だけになった【エンジェル】を、はるか後方で様子を見ていた別の【エンジェル】に向かって投げつけた。

「なっ!!」

2tの塊を投げつけられる予想をしていなかったパイロットは、回避をすることが出来ずそのまま塊にぶつかり、彼の【エンジェル】は後方に20m近く吹っ飛んだ。

「この野郎!!」

友軍機の仇とばかりに巨大粒子砲をフルチャージでベンザ卿めがけて発射する。衝撃波が一带を包み込んだ。しかしベンザ卿は、その幻想をぶち壊す自慢の右手で、次元ごとビームを捻じ曲げ、粒子砲の光線を地面に叩き付けた。

「化け門め……」

「私が化け物なら……人々を虫けらのように殺す貴様らは何だ!!」

ベンザ卿は口笛を吹く、するとその音は振動として大気に伝わり、エアキャッターとなり先ほどの【エンジェル】の両足を切り落とし行動不能にした。

「このっ!! 砕け散りなさい!!」

頭上から最後の一機が巨大な拳を振り上げベンザ卿を殴りつけた。金属の碎ける音が周囲に響いた。だが砕け散ったのはベンザ卿ではなく【エンジェル】拳の方だった。ベンザ卿は驚愕して立ち尽くす最後の【エンジェル】に対して、頭突きを喰らわせ戦闘不能にした。気がつけばベンザ卿の周囲は鉄屑の山になっていた。

（ここは地獄だろうか……）

ベンザ卿はそう呟いた。ベンザ卿は自分の力が信じられないでいた。力に対する恐怖。この力で人々を救える希望。その二つを同時に感じ取り、ベンザ卿の体は震えていた。

その時だった。

先ほど頭突きで仕留めた【エンジェル】の中からパイロットが脱出してきた。ベンザ卿は驚いた。

出てきたのは美しい金髪、金色に輝く瞳、紛れも無い天界人だ。しかしベンザ卿が驚いたのはそこではなかった。パイロットはポニーテールの女性だったのだ。しかも外見から察するにまだ成人していないだろう。そして、はじめに彼女が言い放った一言に驚愕した。

「クソッ！！　よくも家畜（人間）の分際で私たちの仲間を……」

「なん…だと……」

ベンザ卿は一步、また一步と怒りで肩を震わせながら少女に向かって歩いていった。少女は近づいてくるベンザ卿に気づくと、急いで逃げ出そうとしたが、腰を抜かしているらしく一瞬で追いつかれてしまった。

「貴様、さっき何といった？」

ベンザ卿は感情の無い声で言い放つ

「だっ、黙れ、家畜（人間）！！　おっ、女だと思ってなめるなよ！！　私は貴様らにどんな辱め（はずかしめ）や尋問を受けても何も喋らな……」

轟音が少女の声を掻き消した。ベンザ卿が空間を殴りつけたのだ。ベンザ卿が放ったその拳は空間と時空を巻き込み、少女のはるか後ろにあった2千メートル級の山々を粉碎した。

「今、何と言ったか聞いている？」

ベンザ卿からすると少し力を解放し、脅しをかけただけだった。しかし少女はあまりの恐怖に失禁し地面に世界地図を描いていた。

「かつ、かつ、家畜……ですう……」

彼女は目に涙を浮かべながら聞き取るのも困難な小さな声で答える。ベンザ卿はそんな彼女の襟首を掴んで顔をこちらに引き寄せた。

「何故私たちを家畜と呼ぶ！！ 何故そこまで残酷になれる！！ 貴様らと私たちの違いは、目と髪の色くらいだろうに！！」

「だっ、だって皆が……隊長………うあああああつ、ママあつっっん」

ついに少女は子供のよう到大粒の涙を流しながら泣いてしまった。このときベンザ卿は自分が愚かな質問をしたことを後悔した。彼らにとって我々を家畜と呼ぶのは、我々が牛や豚をそう呼ぶのと同じなのだ。昔からそれが当たり前なのだ、それが彼らの歴史なのだ。ベンザ卿もいきなり牛に「何故私を家畜と呼ぶのだ？」と質問されたら、答えられないだろう。ベンザ卿は少女から手を放してやった。彼女は地面にへたり込むとそのまま大声で泣き続けた。

「殺さないのですか？」

どこに隠れていたのか、気配も無く悪魔は突然現れた。

「殺してどうなる、あと武器をもたんものは殺さん。これでもまだ騎士なものでな」

ベンザ卿は力なくそう言った。

「いいのですか？ 彼女、もしくはその仲間はあなたの仲間を皆殺しにしたのですよ」

「彼女をバラバラにしてこの罪を償わせようとしても？ 確かに私はこいつらが憎い、だがそれでどうなる？ 私の気分が良くなるとでも？ いいか、何も変わらないんだ。人間も天界人も……」

その言葉に悪魔は驚いた表情を見せた

「戦場で戦った兵士に、娘を愛した親がいた。親を思った子がいた。人は力を持つと周囲がなにも見えなくなる、彼らは技術という名の力で身を固めここにやってきた。しかしどうだ、その力を剥がされた彼らは我々と何が違うというのだ……」

ベンザ卿が素晴らしい終わるとほぼ同時だっただろうか周囲に散らばっている【エンジェル】の残骸から次々と天界人が這い出してきた。

「ベンザ卿……まさか急所を外……」

「私はこの力で人を殺さない」

悪魔がその言葉を言い終える前にベンザ卿は宣言した。その低い声からは固い決意を感じ取れた。

「今更なにを！！ あなたは力を手に入れる前から戦士として、すでに何人もの人を殺めていたはずだ！！」

悪魔は声を荒げた。それに応じてか、ベンザ卿が吼えた。

「それは戦での死だ。互いに命を賭け、大切なもののため戦い命を殺めた。しかしこの力は違う。ただ圧倒し、捻り潰す、そこには何も無い。この力は人に使ってはならない闇の力だ。彼らも同じ人なのだ!! この力で人を殺めたら、私は人じゃなくなってしまう…：いやもう私は人ではない、だかこの力で人を殺めたら、私が私フアルコンベンザで無くなってしまう…：そんな気がするのだ」

悪魔は黙り込みただベンザ卿を見つめている。

「こんなのものは言い訳だな。私に力を使う度胸が無かったのだ。その力と向き合う度胸が、だからといって、この世界をこのままにはしない、彼らには自分の世界にお引取り願う」

銀と赤、2人は黙り込み、それぞれお互いを見つめ合った。

「あと何分だ？」

先に口を開いたのはベンザ卿だった。

「残り25分です」

「マテンロウまでどれくらいだ？」

「今のあなたなら5分あれば到着します」

「5分か…：時間が惜しい、出発する」

そう言ってベンザ卿は両足の膝を曲げて跳躍の体制をとる。

「待ってください!!」

悪魔がベンザ卿を呼びとめ、ベンザ卿は無言で悪魔の顔を見つめた。

「少し私に時間ください、あなたの時間を、話しておかなければいけないことができました」

悪魔の額には汗がにじみ出ており、拳は固く握られていた。悪魔の表情からは事の重大さが感じ取れた。

「5分だ」

ベンザ卿はただ一言そう言った。すると悪魔は無言で頭を下げて大声でこう言った。

「実は私は悪魔ではありません。冥界人なのです」

白銀の鬼神（後書き）

ごめんなさい ファンタジー初挑戦でグダグダになってしまいました。

ファンタジーファンの方本当にすいません。

この作品はファンタジー王道というよりも邪道のような気がします。

・ 自分にもっと文章力があればもっと皆様にも楽しんでもらえたのに・

感想お待ちしております。

面白くない

私と結婚して

なんでも結構です。自由に書いてください。
作者の力になります。

それはシャアザクですか？　いいえマラサイです。**(前書き)**

悪魔は冥界人だった。

それはシャアザクですか？いいえマラサイです。

「そうか」

その言葉を聞いてベンザ卿は一言呟いた。

「驚かないのですね……」

悪魔は少し驚いた表情をみせた

「私は悪魔や幽霊の類を信じないものでね、ましてやこんな時代だ。そんな奇怪な格好をしていたら、奴らと同じ異世界からやって来たと思うのが当然だろ」

ベンザ卿は冷静に答えた。それを見て悪魔は「そうですか」と天を仰いだ。

「天界では機械技術が発達し、私たちの冥界では魔法術が発達しました。今、私がしているこの悪魔の格好は、変装術式の一つです」

突如悪魔の体が光に包まれたかと思うと、一瞬にしてその場に一人の女性が現れた。腰までサラリ伸びた紅蓮の髪、真紅の瞳、気品の漂う口元は赤の口紅で彩られており。肌の色は真珠のような白い肌をしている。そのあまりの美しさにベンザ卿も声を漏らした。

「いま驚かされましたよ」

美しい顔立ちをした冥界人は柔らかい笑みを浮かべた

「どうでしたか？ 私の悪魔の変装は完璧でしたでしょう？」

「いや、ずっとシャアザクのコスプレだと思っていました」

「シャアザク……？ コスプレ……？」

冥界人は軽く首を傾げた。

「いや、ちょっとした冗談ですよ」

少し困った顔をした冥界人に、ベンザ卿はそう付け加えた。

「そういえば名前を名乗っていませんでしたね。私の名前は、シャル・ディアロ・マラサイです。気軽にマラサイとお呼びください」

「そっちだったか……」

「先ほどから何をおっしゃっているのですか？」

本当に困った顔をするマラサイにベンザ卿は笑みを向けた。

「いや、独り言ですよ。それよりあなたが悪魔じゃないと言うのなら、私の寿命もあと23分というのも嘘だと言って欲しいのだが？」

ここにきて始めてベンザ卿は真面目な表情をみせた。

「いえ、それは本当です」

その問いにマラサイは申し訳なさそうな声で告げた。

「やはりか……」

ベンザ卿は手を顎に添え、少し俯いた。

「私は貴方に、悪魔契約と偽って、貴方の血に【カオス】を混入させました」

「【カオス】？」

ベンザ卿は頭に疑問符を浮かべた様な顔をしてマラサイを見つめた。

「はい、冥界で開発させた身体強化薬、それが【カオス】です。冥界の地下でおよ千年かけて魔力蓄積された魔石をさらに濃縮、精製させ出来る液体です。これを人体に投与すると」

マラサイは言葉を詰まらせる。

「どのような力があるというのは、貴方が一番理解しているはずですよ」

マラサイは右手を前に突き出した。すると手の平から【カオス】の物と思われる情報が次々と空中に投影されていく。

「なぜ、ここまで強力な薬を製造する必要があった？」

「それも貴方が一番ご存知なはずですよ」

ベンザ卿は腕を組み、思考をめぐらせる。少し間をおいて静かにベンザ卿が答えた。

「天界人による、人間界侵略か……」

この答えに満足したのかマラサイは少し笑顔をみせた。

「察しがいいですね、我々冥界政府はこの事態を非常に重く受け止めました。人間界を征服した後、彼らは果たして人間界だけで満足するのだろうか？」

「あんたらの上は、天界人の次の目標は冥界……そう考えた訳だな」

「ええ、冥界およびその傘下の4世界と考えたわけです。それにあの強力な天界兵器を目の当たりにした私たちは、まだ発想段階であった【カオス】を急いで実戦で利用できる状態に完成させる必要があったのです。そこで私たちは……」

マラサイはそこで言葉を切った。ベンザ卿、マラサイ、一瞬の沈黙が2人を包み込んだ

「人間界での、人体実験に踏み切ったのです」

静かにそう言ったマラサイの表情は少し悲しそうに見える。

「私たちは、人間界に潜入し、貴方のような絶望して力を欲するものに、片っ端から声をかけて回りました。そしてあなたと同じように体内に【カオス】を投与したのです」

「それはおかしい話だ。そんなことをして回ったら、噂にところか大騒ぎにだなるろうに」

「皆投与した瞬間すぐに死んでしまったんです。体が強力な魔力に耐えられなかったのです。貴方が現れるまで、人間の最高生存時間は47秒、冥界人でも2分半が最高でした」

先ほどとは違いマラサイの表情にすっかり悲しみが表れていた。

「無理やり実験をしたものではありません。命の危険があることは事前に説明していました……それでも彼らは首を縦に振ったのです」

「そうだとっても酷い事を……」

ベンザ卿はただ静かにそう言った。マラサイベンザ卿を無言で見つめた後、静かに頷き話を続けた。

「初めて貴方と出会い、計測機器で貴方を計った時、私は驚愕しました。なにせ【カオス】投与後1時間以上の生存が可能という結果が出たのですから、まだ実験段階の【カオス】でここまでの……」

「何故だ？」

「分かりません。何故あなたがここまでの時間……」

「そうじゃない。何故私にこの話をした？本来本人に話してはいけないことだろう？」

その質問にマラサイはベンザ卿から視線を逸らし黙り込んだ。少しの沈黙の後、マラサイはその小さな口を開いた。

「貴方に真実を知っていてほしかったのです」

その声はあまりにも小さくベンザ卿には聞き取ることができなかった。

「今なんと？」

マラサイは大量の空気を肺に送り込んだ。

「貴方には、全てを知った上で、戦う決断して欲しかったのです！
」

今度は周囲に響くほどの大声で叫んだ。いきなりの大声に驚き後退りするベンザ卿。

「もう時間ですね。話は以上です。私はただ貴方がモルモットであることを教えたかっただけです」

そう言って彼女は強引に話を切り上げ、そっぽを向いてしまった。大声を出したせいなのか、はたまた別の理由なのか、その時のマラサイの頬は少し朱色に染まって見えた。

それはシャアザクですか？いいえマラサイです。（後書き）

私にシリアスは荷が重すぎたようです。

話を少し急ぎすぎたようです。

しかしこんな雑魚でもがんばって小説書いてます。

感想・レビュー・評価お待ちしています。

特に感想、いいところ悪いところ、自由に書いてください。

摩天楼『マテンロウ』

「飛んで火に入る夏の虫……まさにこの事ではないかねノア君？」

マッケンバウアー大將は不敵な笑みを浮かべ、隣のノア大佐に向けてそう言い放った。ノア大佐は横目で大將を一瞬見ると「ハッ……」と短く答えた。大將はやれやれ堅苦しい男だといわんばかりに首を振る。2人がいる場所はマテンロウ要塞総司令部。司令室内では緊急事態を示す赤ランプが各部署で点灯し、常にブザーの音が鳴り響いている。彼らの周囲では約100名のオペレータが、要塞に接近する未確認の敵の対応に追われていた。巨大な部屋の中央にある巨大スクリーンには1つの赤点が表示されている。

「敵を捕捉中……なんだこの速度は！！ マッハを超えてる……」

部屋のオペレーターがそう報告した。スクリーン画面は天界軍自慢の高性能魔道粒子式レーダーの物である。

そこに映し出された赤点は信じられない速度でこの要塞に接近していた。

「いやはや、せっかくこちらから出向くところだったの、にわざわざ向こうからこちらに来ちゃうなんて……楽しみだな」

大將は顎を手で擦りながら相変わらずの笑顔である。（この人は何を考えているんだ……）隣のノア大佐はそんなことを考えながら大將の表情を確認した。

「おい、わが軍の配備状況は？」

その視線に気が付いたのか、大將は突然大佐にそう言った。

「ハッ、只今の配備状況は、地上の要塞周辺に【モロナイ】戦車1000台を配置。同時に歩兵5千人【エンジェル】800機も配備しています。空は【ケルビム級】戦艦8隻、【パワーズ級】航空イージス艦が15隻配備を終えていつでも戦闘可能な状態です。なお駐屯地から敵迎撃に向かわせた【スローズ級】航空母艦1隻と【ケルビム級】戦艦2隻はこちら合流するように指示をだしました。合流予定は3分後です。また天界本部からもゲートを通して増援が到着する予定です」

大佐は質問を予期していたかのようにスラスラと答えた。そして他に何か？という表情で大將に視線を送った。

「ほう、ならば小手調べだ。ノア、全【パワーズ級】イージス艦に、対飛龍長距離用高性能追尾式ミサイルを準備させろ」

対飛龍長距離用高性能追尾式ミサイル……これは天界に生息する絶対的な捕食者、飛龍を討伐するために開発された兵器である。

（天界に生息している飛龍の皮膚は【ケルビム級】戦艦の3倍の硬さと強度を備えている）

通常これが飛龍討伐以外に使用されることは無い、何故か？

それは1発で半径10キロを雑草1本生えない不毛の大地に変える過剰火力兵器だからだ。ノア大佐は少し戸惑いの表情を見せたがすぐさま15人の艦長達に命令を伝えた。この人に少しでも逆らってはいけない、大佐の本能がそれを感じ取っていた。

マテンロウ要塞、その上空に待機していた15隻の【パワーズ級】イージス艦の後部ハッチが一斉に開放された。そしてイージス艦後部からは銀色をしたミサイルがゆっくり頭を出す。対飛龍長距離用高性能追尾式ミサイル別名銀の槍である。その銀の槍が一斉に敵の接近する東の空に向けられた。

「1・2・3・4・5・番艦準備完了」

「10から15番艦も準備完了」

「6から9番も準備完了しました」

各オペレータたちが攻撃準備完了の報告をする。

「カウントだ」

部屋中に大将の声が響き渡り、片手を上に振り上げた。部屋中が赤の非常灯に切り替わりカウントが開始された。

「カウント開始!! 5……4……」

「3……2……」

【パワーズ級】イージス艦システム制御室

「……1……カウントゼロ!!」

ボタンの安全装置が一斉解除された。

「「ファイヤー!!!!!!!!!!!!!!」」

二人の仕官が同時に最後の安全装置を解除し、ミサイル発射スイッチを押した。太陽の光を反射しながら輝く槍は天空に放たれた。周囲の山々を揺るがすかような轟音が響き、各イージス艦から空に向けて15本の白線が伸びていった。

司令室のスクリーンに15の青点が表示され、赤い点に向かっていく

「ターゲット接触まであと30秒……20秒……10……9……8……7……6……5……4……3……なっ、馬鹿な!!!!」

「大変です大佐!!! ターゲット到達前にミサイル消滅!!! 消滅です!!! 15発の銀の槍が一斉消滅しました!!!」

「ターゲット健在!!! 繰り替えず、ターゲット健在!!! あと3分でマテンロウ要塞に到達します」

司令室内は火事場のごとく大騒ぎになった。

「ありえない……」

大佐は心の中でそう言ったつもりだった。しかしそれは言葉として現れていた。ノア大佐は目の前で起きている事態を受け止めることができなかった。消滅……しかも15発同時に……いったいあそこで何が起きたのか……

「貴様はいつまでそのバカ面をしているのかね?」

司令室内が一斉に静まり返った。まるで時間が止まったようだ。それまでの一部始終を同じく目撃していた大將は今だ満面の笑みを浮かべていた。

「なにが「ありえない」のだ？ 貴様は真実をこの目で目撃した。それはその時点でその「ありえない」という可能性は消滅したのだよ、オワカリですか……大佐殿？」

大將はいっそう声を張り上げ周囲を見渡した。

「いいですか皆さん今から戦です。しかしこれまでのような蟻をプチプチするような戦ではありません、我々がプチプチされる可能性のある戦です」

大將は胸に拳を当て叫んだ。

「気を引き締ろ諸君!!」

大將は静寂に包まれた司令室を見渡した。

「……プチプチされないようにな……以上……」

騒ぎの続きをしたまえ、そう付け加え大將は一步後ろに下がった。その一言で止まった時間は再び動きだした。先ほどより忙しく……そして激しく。

「大將!!」

その時だった。一人の兵士が司令室に飛び込んできた。マッケンバ

ウアーは無言でその兵士を直視する。

「大将お電話です」

「繋げ」

そう一言言った大将に兵士が耳打ちする。

「將軍、天皇閣下からの直通、白電話です」

それを聞いた大将は一瞬気だるげな表情をしたが、了解した。と言いつて司令室の中央の白い電話の受話器を取った。するとだんだん大将の顔がいつも以上の笑顔に変わっていく、そして1分もたたないうちに受話器をおいた。

大将はいつも笑顔である、しかし今の笑顔は違った。その場にいる全員が同じ感情を抱いたのだ。それは「恐怖」大将は人々をかき分け部屋の中に向かう。中心に立つと大将は2，3回手を叩き周囲の注目を集めた。

大将は叫ぶ。

「全軍今から新しい命令を下す!!」

黄金の引き出し（前書き）

ミサイル攻撃を回避したベンザ卿はついに摩天楼に到着した。

黄金の引き出し

丘を吹きぬけた一陣の風が、銀色に輝く騎士の羽飾りを躍らせる。風は周囲の若草を撫で回し、やがて何処かに吹き抜けて行ってしまった。

「ついにここまで来ましたね」

騎士の脳内に、美しい女性の囁きが響き、全身の感覚を冴え渡らせる。騎士は頭をすっぱりと頭を覆ったグレートヘルムの位置を微調整すると、低く太い声でそれに答えた。

「ああ、やつとだ。とても濃厚な50分だったよ」

丘の頂上にたたずむ騎士は、摩天楼に集結した天界軍を睥睨^{マテンロウ}んだ。

地面からは高さ3kmはあるかと思われる巨大な塔が二本聳え立ち、その塔と塔の間の空間を湾曲させている。その周囲には塔を守るべく、歩兵3万人、戦車2000両と二脚兵器が800機、空中戦艦26隻が集結していた。天界軍はこの作戦で勝利を収めるの為に用意できる最高の戦力を準備した。これはこの人間界に駐屯する天界軍の約5割が集結した形となる。つまりこれはたった一人の人間を、世界最強軍隊がそれだけの戦力を投入する価値のある人間だと認めたということだ。騎士は雑兵を眼下に薄い笑みを浮かべ、地表の荒波に向けて一步を踏み出す。その瞬間、銀色の光が大空に舞い上がった。

この戦いに赴く騎士の名は『ファルコン・ベンザ』、余命15分の男。

衝撃と爆発、それが同時に天界軍の歩兵を襲った。ベンザ卿はなにもしていない、ただ丘から跳躍して、地面に着地しただけなのだ。しかし音速を超えた騎士の着地は、彗星の直撃の如く地面に大穴を開け部隊の先頭にいた歩兵500人が、爆風に煽られた砂塵と共に宙を舞った。

「奴だ!! 殺せ!!」

宙を舞って気絶した兵士たちが雨のように降り注ぐ中、突然の襲撃で動揺する部隊の中、誰かがとっさに叫んだ。その声により動揺から立ち直った兵士たちは、砂煙に遮られた大穴に向けて一斉に銃を向ける。この地方独特の北風が、立ち込める砂煙を洗い流し、太陽が大穴の中央に佇む銀色のプレートアーマーを照らした。

「撃てっ!!」

誰がそういったのかはわからない、しかしその言葉がベンザ卿の耳に届いたと同時に、全身に衝撃が走った。陣に立った歩兵部隊千人の一斉射撃がベンザ卿を襲ったのだ。弾丸の大波が点ではなく面でベンザ卿に襲い掛かり、卿をジリジリ後退させる。

「航空支援!! 座標を送る」

『了解、座標確認、フォーメーションA、東から5秒後だ』

隊長が無線機に向かってドラ声をぶつけた数秒後、高出力魔動力エンジンが大気を震わせ、無数の白い機影が空を埋め尽くした。50機あまりの『アーク・エンジェル』飛行編隊が上空に飛来したのだ。編隊は旋回しながら35m速射砲の嵐を地表に浴びせかけ、

周囲の地面を削り取り、打ち砕いた。

「地獄だぜ……」

兵士の一人がそう呟いた。そうまさにこの場は地獄だった。空からは無数の火の雨が降り、鉄の風が全てを切り裂き、貫く。兵士は大学在学中に受けた、世界の誕生という授業を思い出していた。全知全能の神『アース』様が世界を創生なされたとき、その生まれたての世界には緑も海も存在せず、人いや、生物も住まず。ただ毎日のように火の雨が降り、マグマの海が広がり、常に大地は震えていたという。そのような内容だったはずだ。実のところ兵士も詳しい授業の内容は忘れてしまっていた。しかしそ授業の最後に無理やり見させられた、神が世界を創生なさる様子を再現したイメージ映像は鮮明に覚えていた。天界の最高の技術で再現されたそれは、その授業を受けていた全員を放心状態にするほどの出来ばえだったのだ。そしてその映像が目の前で再生されている。いや再現されているのだ。

「弾着準備！！ 10秒」

「ジューーーーー！びゅーーーーー！！」

「歩兵部隊、伏せろ！！」

先ほどの隊長のドラ声が、耳に装着した小型魔動無線機に飛び込んできて、兵士は正気をとりも出した。そして慌てて地面に伏せる。地面にうつ伏せになり頬に土の感触を感じたと同時に、耳を劈く雷鳴が響く。空中戦艦26隻による一斉艦砲射撃が開始されたのだ。兵士たちはみなその轟音に耐え切れず思わず耳をふさいでしまう。

「ヒーーーーー！！ ここは荒野のウエスタンだぜ！！」

「汚物は消毒だ！！」

この激しい戦闘で、脳内麻薬が過剰に出ているのだろう、一部の兵士は、この激しい業火を目の前に、奇声を上げた。

「そいつは違うぜ」

先ほどの兵士は、狂った兵士を横目に鼻を鳴らす。そして眼前の光景を目に焼き付けながら、ポツリと言った。

「こいつは浄化だ……」

その言葉と同時に、砲弾が着弾し周囲の大地を浄化させた。

頭の中で声がする。

（ベンザ卿！！ 起きて下さい！！ ベンザ卿！！）

目を開けたベンザ卿は辺りを見渡した。今ベンザ卿がいるのは廊下のような場所だ。石壁と大理石の床がひたすら続き、所々で分岐している。ベンザ卿は今自分がいるのは、地下迷宮のような場所だろうと勝手に検討をつけた。

（ベンザ卿、敵が来ます……お願いです……立ち上がって……）

再び頭の中で再び声が反響した。透き通った美しい声だ。高さからして女性だろう。さらにその女性の声は先ほどと比べて、涙を含

む声に変わりつつある。

（だれだ……この声は……女……？それとも）

ベンザ卿は深い意識の迷路の中を歩きながらその声に応えた。

「ニュー……ハーフ？」

（失礼です！！私は女性です！！お・ん・な・の子です！！）

あまりの大声に頭を抑えるベンザ卿。ベンザ卿は昔戦場でモニングスターで後頭部を強打されたときの事を思い出した。その様子を見たのか、それとも感じたのか、女性は（アッ、申し訳ありません）と謝罪を述べた。

（ベンザ卿！！聞こえてますか？ 無事でよかった……）

女性は声色を変えて、先ほどより強くベンザ卿の意識に語りかけてきた。

「君は……誰だ……ここはどこかね？」

（私です、マラサイです。シャル・ディアロ・マラサイ！！あなたが今入る場所は【カオス】の自己防衛プログラムの中です。あなたは戦闘中に脳に強い衝撃を受け、【カオス】が脳内のメモリーの破損などを防ぐため一時的にあなたの意識を退避させました、覚えていらっしませんか？）

「マラ……サイ……」

ベンザ卿は無数の引き出しから、マラサイを搜索する。

マラサイ

マラサイ

マラサイ

言葉が脳内でこだまし、反響する。入り組んだ迷路を疾走し、たった一つの記憶の引き出しを探す。

（マラ……サイ！！！！）

突如通路の真ん中に光り輝く箱が出現する。その箱には黄金に輝く引き手がついており、ただならぬオーラを帯びていた。

「これか……」

ベンザ卿はそう呟くと、勢いよくその引き出しを引いた。

「マラサイ……『ハイザック』を発展させたの量産機。全高17.5m。重量33.1t。装甲はガンダリウム合金製、武装は頭部バルカン、ビームサーベル、ビームライフル……」

（引き出しどころか、訪れる国を間違えてるレベルです！！ 私はそんな装甲車みたいなのじゃありません！！ 女です！！ 女性なんです！！）

激怒する女性の声で頭がグラグラと揺れる。ベンザ卿はふと、過去に晩餐会で名前を2度間違えて怒らせてしまったご婦人を思い出した。その時もひどい目にあったのだが、それを思い出したベンザ卿は、慌てて女性に落ち着くように伝え、訂正を告げる。

「失礼したご婦人！！ あとこれは装甲車ではない！！ モビル○スーツだ」

（そんなのどちらでもいいです！！ しかもその○はおそらく意味が無いです！！）
（といいますかなぜ『ハイザック』お父様の名前をご存知で！？）

ベンザ卿の思考が停止する。

「この件は何もツッコミを入れない！！ どうなっているんだ！！」
（こちらの台詞です。もう泣きたいくらいです……）

天に向かって雄たけびを上げるベンザ卿に対して、マラサイは大きなため息を漏らした。

「さてとマラサイ、冗談はここからだ！！」
（まだお続けになるのですか！？）

予想通りの反応をしたマラサイに、ベンザ卿は満足そうな表情を浮かべた。

「全て冗談だ。君のような美しい女性を忘れるわけがないだろう。本当に真面目だな君は、ついからかってしまった。申し訳ない、すぐ戻る」

（次からは無視しますから、そのつもりでベンザ卿……）

呆れて声上げるマラサイ。ベンザ卿は彼女が、額に手をつけてやれやれと首を振っている姿が目に見え、心の中で苦笑する。

駆け回っていた迷路はすでに消え去り、一本道となっていた。その道の先には光が漏れ出している巨大な扉が聳え立ち、ベンザ卿を待ち構えている。ベンザ卿は先ほどのやり取りを思い出し、微笑を浮かべながら早足で出口に向かう。出口にたどり着いたベンザ卿は、

ゆっくりと意識の扉に手を伸ばした。金属製の取っ手が手に触れて、冷気が背筋を走る。ベンザ卿はゆっくりと、しかし力から強く戸を引いた。

ガン……………

ガチャガチャ……………

……………

「ん!？」

ベンザ卿は思わず情け無い声を出してしまう。

「鍵……………いや、開いている」

頭に疑問符を浮かべ、ドアノブをガチャガチャ動かしながら扉を開けようとする。しかし扉はビクともしない。

（意識を取り戻すには何か足りないのか……………）

ベンザ卿はグレートヘルムの上からあごを撫でて、思考にふける。

（あの……………ベンザ卿？）

「マラサイよ、何かまこの空間で必要なものもあるのかね？」

（いえ、そうではなくてですね……………）

先ほどのやり取りなどどこ吹く風か、落ち着いた声でマラサイがベンザ卿に囁きかけた。

（もしかしてその扉はジパング式ではありませんか？）

ベンザ卿は感心した表情でポンと手を鳴らすと、ドアを外側に開き再び戦場に向かった。

黄金の引き出し（後書き）

まずは土下座から、

すいません2ヶ月以上放置状態でした。申し訳ありません。

まだまだ素人の作品ですが、生暖かい目で見守ってください。

些細なことでもかまいません、感想をおまちしています!!

ここがいまいち、なども書いていただけるとうれしいです!!
勉強になりますから!!

便座カバーとは、人生の中でかかせない言葉である、それと便座カバーとイマジ

敵の猛攻撃により意識を失っていたベンザ卿だったがついに……

便座カバーとは、人生の中でかかせない言葉である、それと便座カバーとイメージ

ベンザ卿は重い目蓋を開いた。眼前に広がるはずの青空は『エンジェル』の黒い影で埋め尽くされ、空はまるで今から大雨が降らんとするようなドス黒い色に染まっていた。

（戻ったか……）

意識をハッキリとさせ脳を稼働させるために大きく深呼吸し、肺に空気を送り込んだ。薄汚れた空気を体内に取り込むと、同時に鉄の焼ける臭い、土の香りが脳天を突き抜ける。ベンザ卿は苦虫を噛み砕いたような顔をして、以前と変わらぬ風景にため息交じりの吐息を漏らした。そして体を動かそうと脳に信号を送るが、しかし体がまったく言うことを聞かない。

これはいったい……と、唯一自分の命令に従った首を動かし、自分の置かれている状況を確認する。ぐるりとあたりを見渡すと、自分のいる場所と地面に高低さがある。以前の記憶と照らし合わせ、自分が砲撃で削り取られた爆破クレーターの中にいることがわかった。そして自分の体をに目を向けると、大の字に地面に広げられた体は砲撃の勢いによって半分地面に埋まっている状態だった。ベンザ卿はこの状態から一刻も早く脱出するために脱皮をする蟬のように体を根性でくねらせ土の中から這い出した。人工クレーターの中でゆっくりと立ち上がったベンザ卿は鎧の土を払い落とすと口に溜まった血を周囲にぶちまけた。

「マラサイ聞こえているかな？」

兜の口元から滴る鮮血を腕でぬぐいながら、ベンザ卿は声に出してマラサイを呼んだ。

（ベンザ卿！！ 大丈夫ですか！！ いったいそれは……）

「また君の声が聞けてうれしいよ、あの扉の向こうは半ば地獄だとおもっていたからね」

体中を駆ける激痛に耐えかねてベンザ卿は血の池の中心で両ひざを付いた。

（ベンザ卿！！ そんなことよりその体は！！）

「その様子では君も知らないようだな、わたしは、てっきりあと10分は……無敵かと思っていたよ」

（そうです、カオスは無敵のはずです！！ 現にミサイルも無力化したのになぜこの程度の攻で……？）

「なぜか知りたいか……？」

重く冷たい声が、ベンザ卿の背後から聞こえた。ベンザ卿は突然のことにも関わらず、超人的な反射神経で立ち上がり振り返ったが、バランスを崩して片手を付いた。そして思わず小さく舌打ちをする。体がまるで言う事を聞かない。ベンザ卿はまるで体中を鎖で縛り付けてられているような錯覚をおぼえた。

「おやおや重症だねーファルコン・ベンザ卿？」

今度はあざ笑うかのような声が頭上から聞こえ、ベンザ卿は真上に顔を向けた。声の主は男だった。立派な軍服を身にまとい、胸には数え切れないほどの勲章をぶら下げている。

<鷹のような男だ>

ベンザ卿は内心そう呟いた。男は口元を緩ませ、ろくに手入れもされていない赤茶の顎鬚と、グリースで茶色に輝くオールバックの髪型は一見、だらしない狸のようにも見えるのだがベンザ卿は目を見て直感的にそう感じた。どんなにだらしない表情と姿をしようとも、その男の瞳は常に獲物に餓えている。猛禽類という印象をベンザ卿は脳内に焼き付けられた。

そして鷹という生き物を想像したのは、ほかの理由もあった。男が宙に浮いていたからだ。ベンザ卿は自分も空を飛べるのでこの点は難なく受け入れられたが、他の点はベンザ卿の度肝をぬいた。男は青白く光っていおり、さらに体も半透明なのだ。

(亡霊)

ベンザ卿はそれに近いものという結論を出したが。脳内でマラサイがその異常現象の解説を加える。

(ベンザ卿あれはホログラム、つまり幻影です。やつの本体は別のところですよ)

「おや、名門シャル・ディアロ家のお嬢様も一緒にね？」

これに驚いたのはマラサイだった。ベンザ卿の脳内で微かに、息を詰まらせたような声がした。

(テレパシー
通信魔法を傍受されているようです……)

マラサイはそう呟やいたと同時に、ベンザ卿の隣で火の手が上がる

った。その炎は徐々に火柱を作り、火柱は女性の形に姿を変え。数秒としないうちに、ベンザ卿の隣には赤く光るマラサイが佇んでいた。例の男と同じでマラサイの体も透けていることから、こちらも幻影であろうとベンザ卿は勝手に解釈した。

「これはこれは、天界軍大将、ジョン・マッケンバウアー將軍。お目にかかれて光栄ですわ」

マラサイは真紅のバトルドレスの裾を持ち上げるとワザとらしく会釈をした。

「これはご丁寧に。それにしても名門のお嬢様がこのような戦場で、バーサーカー狂戦士と何故一緒に居られるのか？ 小生には、まったくもって検討もつきません。よろしければご説明願いたいものですな」

これに対して、大将もわざとらしく深々と腰を折った。

「説明する義理はございませんは大将さま」

「何をおっしゃいますか！？ここは我々天界の領土！！我々の世界ですぞ。不法入国いや、不法入界とも言いまししょうか？」

大将はまるで演説のように両手を広げ、無知な大衆に語りかけるような口調でそう述べた。

「はて、私の知識ではここは人間界のはずです、いつから天界の實質的な傘下世界になったのやら？」

マラサイは片手を頬につけると、考え込むような動作を見せて小首をかしげた。フッフツ………空気の抜けるような音が数回続いた後、

大将は突如笑い出した。

「ふっ……ハハハハハハっつ、下手に出ればいきがりやがって小娘がっ!!」

白く整列した歯を見せつけながら、大将の茶色の瞳が目の中で、煮え立つマグマのように激しく揺れた。

「おっとそういうえば話が逸れていましたね。何故、我々の、攻撃が、効果があつたのか？ という内容でしたね。私は親切な軍人ですからね。特別に答えしましょう、《SGB》システムですよ!! マラサイさんあなたならご存知でしょう？」

マラサイの表情に、驚愕の色が見て取れた。まるで水を失った魚のように口をパクパクさせている。この表情にはベンザ卿も驚いた。彼女がここまでうろたえているのを初めてみたからだ。

「何故……《SGB》ソゲブを……」

その声はかすれて、5メートル以上離れている奴には聞こえたかどうか怪しかったが。奴は勝手に話し始めた。

「いいですか猛犬を飼うときに一番大切なのは、自分の手を噛まれないようにすることです。首輪をつけたりしてね。で、その首輪がこれソゲブ《SGB》なのですよ」

「ソゲブ？」

「そうそう、ソ、ゲ、ブ。です。」

いいぜ てめえが何でも 思い通りに出来るってなら まずはそのふざけた 幻想をぶち壊す
その

幻想を

ぶち壊す

(S) その

(G) 幻想を

(B) ぶち壊す

詳しいことは彼女のほうがご存知じゃないですかね？」

純白の犬歯を見せつけながら、マッケンバウアーはマラサイを指差した。一方マラサイはうつむいて小刻みに震えていた。彼女は終わりの見えない自問自答を繰り返している。何故彼が？ 何所から？ どうやって？ いつ？

「マラサイ……説明してくれ」

ベンザ卿の低いその声が、マラサイを現実に戻した。ハッと顔を上げたマラサイの頬にはいくつも何かが流れ落ちた跡ができていた。

「ソゲブは、冥界軍が【カオス】のりミッターとして開発された魔力吸収結晶です。以前お話したと思いますが、あなたの他にもカオスを投入した検体がいたと」

マラサイは何度か息に詰まりながらもゆっくりと話し始めた。

「実験の時または成功した時、もし検体の暴走などを起こしたとき強制的にその能力を無力化する必要がありました」

「強力な力を得るには、同時に制御する力も必要だったと……」

「はい、そして【カオス】と同時に開発されたのが【ソゲブ】……」

この結晶体を【カオス】の投入患者に打ち込むと、その力を一方的に奪うことができます」

ベンザ卿は痛みの伴う体に手を当てて、舌打ちをした。そしてマッケンバウアーをマラサイと共に睨み付けた。

「そして今一番の謎は……」

「マッケンバウアー！！ 何故あなたたちが【ソゲフ】を使用しているんですか！！」

マラサイは声がかすむ程に叫んだ。悲しみなのか、怒りなのか真紅の瞳から涙がこぼれ、乾いた地面に僅かな水滴の跡をのこした。ベンザ卿は黙って、彼女の震える肩に手をかけようとしたが、まるで霞を掴むかのごとくそのまま空を切った。

（あの時と同じか……）

ベンザ卿はつい1時間前の自分を思い出した。力をてにしても自分は無力なのかと、自分の拳を強く握った。

「その質問には答えなくてもよいでしょう？ だって答えがわかっているからさっきから泣いているのでしょうか？ おじょうちゃん？」

「私はおじょうちゃんなんかじゃありません！！」

不敵な笑みを浮かべて、諭すように語るマッケンバウアーにマラサイは吼えた。するとどうだろう、マッケンバウアーは彼女の表情を楽しむかのように、おやおやと目大きく見開いた。

「まあ答え合わせとしゃれ込みましょう、さっき言いましたよね、

猛犬には鎖が必要だって？ならその猛犬が鎖を噛み切ろうとしています。さあ、どうしますか？ 殺しますよね？ 自由になる前に」

「やめて！！」

マラサイは両耳をふさぎ、その場にうずくまった。しかしマツケンバウアーはそれを見て楽しむように話を続けた。

「どうしてんです？ 知りたいんでしょう？ hahaha, そうですよ、制御のきかない兵器は兵器にあらず、片腕で山を吹き飛ばす化け物の誕生をだれが喜ぶだろう？ 10秒あれば世界を滅ぼす化け物を。作った無能な連中はこう叫ぶ、「やった大成功だ」しかし国を見つめ、この先の世の中を見つめるのもたちは口々にこう言うだろう。「なんとという化け物をつくってしまったんだ」と。そう、たとえば……当初から【カオス】計画に反対の立場をとっていた……ハイザック大将、あなたの父上とか！！」

マラサイの全身から力が抜けて、彼女はそのまま地に両膝を着いた。

「あんたらのお偉いさん一部が、自分たちが相当やばいものを作ったって気がついたわけよ、【カオス】はパンドラの箱だったのさ、そしてその処理に困った彼らは、処理を我々に依頼し情報をリークして、【ソゲブ】対応形の弾丸を提供した。出る釘は打たれる。強すぎる力は味方からも嫉まれる。それがこいつの真相だよ、どうだ想像通りだっただろうマラサイ？」

マラサイは拳を握り締め、唇をきつく結んだ。このような気持ち初めてだ、マラサイは自分の国と父に対して初めて嫌悪に近い感情を抱いた。自分は国を思っ【カオス】を作り上げ、父は国を思

って【ソゲブ】を異国に渡した。うすうす感づいてはいたが、敵から直接それを述べられるほど嫌な事はないだろう。マラサイは濡れた顔を右手で拭く、不思議なことに彼女の目からは涙が止まっていた。

一方上空に浮かぶマッケンバウアーは不思議な行動を示した。顔を横に向けて何かと話しているのだ。口は動いているが声は聞こえてかない。おそらく実際に本人がいる場所で誰かと会話をしているのだろう。数秒会話を交わした後、マッケンバウアーはその鷹の目を見開いて鋭く笑った。ベンザ卿はその鷹の瞳に、しっかりとマラサイが捕らえられていることを見逃さなかった。

「今連絡がはいりましてね、冥界に確認したところ、マラサイお嬢様は湖で休暇を楽しんでいらっしやるとか、ならこの場所にいる貴様はいったい何者だろうか？ これは興味深いですね、捕らえてしっかりと尋問しなければ！！ 魔法逆探知で本体の居場所ももうすぐ特定できますよ？」

ベンザ卿はマラサイの表情を横目で読んだ。そこには先ほどまでとは別人の、冷静な顔立ちをしたマラサイがいた。少し眉間にしわがあるものの、その瞳は未来を見渡せると思わせるほど赤く澄んでいる。ベンザ卿は安心して一息つく、彼女の背中に目をやった。その凜々しい背中からは力に屈さない強烈な意思と、自国に見捨てられた悲しみの匂いがうっすらと漂っており、それがベンザ卿をなんともしえない気持ちにさせた。

「ハハハ h a h a h a ……そろそろフィナーレと洒落込もうじゃないか？」

冷徹な笑い声と共に、青白い男は両手を広げた。その合図と共に、

クレーターの外周でジャラジャと金属の擦れ合う音が響きマラサイとベンザ卿は背中を合わせるような形で、外に目をやった。

完全包囲

この言葉は、今の状況を伝えるのに一番適している言葉だろう。

クレーターの外周には歩兵が2人を逃がさぬように強固な肉壁を作り、全員が小銃を円の内側に向けて構えている。その壁の要所要所には、陸戦形のエンジェルがビーム砲の黒い鋼の色を、こちらに見せつけていた。空には戦艦とその護衛のアークエンジェルがいつでも攻撃を仕掛けられるように、2人の頭上をグルグル旋回している。

ベンザ卿がふと頭上を見上げると男の姿はもうなかった。ベンザ卿はさてどうしようかと、頭をかくいとすぐ後ろで雀の鳴くような声がした。

「ゴメンナサイ……」

「何故あやまる？」

振り返ることなく、ベンザ卿はただそう呟いた。

「私のせいで貴方はこのような状況になり、私の父のせいで貴方は人生を悔いなく人生を終えることができないで終わろうとしています……」

静寂が一瞬2人を包み、ベンザ卿はポツリと礼を述べた「ありがとう」——と。

「何故礼を言うのですか!？」

「これは私の意志だ。私の意志でこうなった。君は私の無力な生き

方を、意味のあるものに変えた。こちらから礼を言う理由があっても謝られる筋合いはない」

ベンザ卿ははっきりとそう言い切った。

「ベンザ卿！！　しかし……」

「私は後悔していない、君が私をみて哀れんでいるのならそれは失礼なことだ。君のおかげで数少ない友人を守れた。ひとつの国を救った。君と出会えた。父上のことは私からはなんとも言えない。しかし彼は君と考え方は違ったが国を思っていた。それだけは忘れないでほしい」

少しうろたえた様子のマラサイにやさしく語りかける。マラサイはまだ納得した様子ではなかったが、今はまだこれでいいとベンザ卿一人頷いた。

「さあ何か遺言はあるかね……？」

虚空にマッケンバウアーの声がとどろき、周囲で壁が一斉に攻撃の態勢を整えた。

「ベンザ卿ここは一旦引いて……」

「そんな時間は残っていない」

そうマラサイの案をバツサリ切り捨てると。ベンザ卿はよろよると拳を構えた。

「しかしこのままでは蜂の巣です！！　それにベンザ卿体が！！」
「あんなものはかすり傷だ。そんなことより君は大丈夫なのかね？」

「これは幻影です。私は別の場所にいます!! そんな話は今はいいですベンザ卿が!!」

「そうじゃない、早く移動しなければ君が捕まってしまう」

「そんなことよりベンザ卿のほうが心配です!!」

ベンザ卿は振り返るとマラサイの目を見つめた。

「私を信用してくれ、安心しろ秘策がある。だから今は自分のことを考えなさいマラサイ」

さらに口を開こうとしたマラサイをベンザ卿は視線で封じた。ベンザ卿の強い意志に、マラサイは少し潤んだ瞳を泳がせて頷いた。

「身を隠したら必ず連絡します」

「ああ、わかった」

素晴らしい残してマラサイの幻影は大きく燃え上がった。そして蝋燭の火のように、フワリと一筋の線をのこして跡形もなく消え去った。

「秘策ねーベンザ卿君は嘘が下手だな」

「よく言われるよ」

再び響いたマッケンバウアーの声に対して、ベンザ卿は鼻を鳴らしてそう答えた。

パチン!!

指を鳴らす乾いた音色が、各兵士たちの無線機に届いた。待ってましたとばかりに兵士たちは引き金に手をかける指に、力を込めて

ゆく。大地に揺るがす砲撃音が突然空間を支配して、ビームの輝き
がその一瞬に色を添えた。

乾いた指の音が……一斉攻撃の合図だった。

迫ってくる、死が。迫ってくるのだ、弾丸が。

近づいてくる、光が。近づいてくるのだ、粒子砲が。

私はここで死ぬのだろうか？ このままでは確実に死ぬだろう。

何か抗う方法はないのか？ 抗う……方法は……

人が幻想を抱くことは間違いなのか。私のこの幻想は壊されてしま
うのか？ この世界の人々を、人々の笑顔を取り戻したい。この
私が抱いた幻想は打ち砕かれてしまうのか。

このまま……

このまま……

いいぜ てめえが何でも 思い通りに出来るってなら まずはそ
のふざけた 幻想をぶち壊す

その

幻想を

ぶち壊す

その
幻想を
ぶち壊す

幻想をぶち壊す？ この私の幻想を？この私の小さな幻想を？
人々の笑顔を、彼女の苦しみを！！

させない

私は引かない！！ 何者にも媚びない！！ 省みない！！

いいぜ てめえが何でも

思い通りに出来るってなら

まずはそのふざけた

幻想を……ぶち壊させない！！

時間が止まった。

いや、厳密に言えば動いている。この世で時間が止まることなど
ありえない、しかし今のベンザ卿からすれば、そう感じられるほど
時間がゆっくりに感じた。こちらに向かって飛んでくる弾丸は、み
な彗星のように尾を引いてゆっくりと、ベンザ卿の額めがけて飛ん
できている。その彗星の合間には光の線が散りばめられ、まるで夜
空を見上げるようだった。

ベンザ卿はふと空を見上げた。するとちょうど上空で、炸裂弾が
爆発したところであった。通常は拡散した小型爆弾が、雨のように

地表に降り注ぎ。周囲の標的の肉を切り裂くのだが、今のベンザ卿はこれが、花火と同じくとても美しいものに感じた。

走馬灯……

ベンザ卿は一瞬そのようなことを考えたが、頭を振ってその考えを隅に追いやった。まだだ、今からだ。まだ死なない。そう必死に自分に言い聞かせると。両手を体の外側に広げた。ベンザ卿の体が銀色に輝いた。時折白の光を放ちながら、両手になにか巨大な力を感じた。耳鳴りが響き、脳を揺らす。それと同時に全身の痛みが引いてゆく。天から光が舞い降りて、ベンザ卿の頭上に光の輪を形づくった。

「俺はこの小さな自分の幻想をぶち壊させない!!」

自分の体の中心から、何か熱いものが溢れ出した。

「やってやるよ!!」
《絶対防^{ベンザ・カパー}御領域》!!」

時間の流れが、元に戻った。弾丸、砲弾、エネルギー弾。クレーターの周囲と上空からの一斉に放たれたそれが、中心に更なる大穴をあけた。巨大な真紅のきのこ雲が浮かんで消え、周囲の兵士たちは衝撃で飛ばされまいと、姿勢を低くして踏ん張った。その後こうこうと立ち上る黒煙はまるで火山の噴火を連想させる。

「やったか!？」

兵士の誰かが、そう呟いた。

「おいバカやめろ!？」

隣の兵士が肩を掴んで彼を叱責する。

「五月蠅い、奴の生死を確認しろ」

すると彼らの上官が二人を叱り付けた。2人の兵士はハッ、と姿勢を伸ばすと、黒煙の立ち込める方向に双眼鏡を向けた。

「何かみえるか？」

「いやなにも」

「だいたい見えるわけねーよ、絶対バラバラだぜ」

パリッ——ガラスの割れる音が兵士の足元で聞こえた。文句をたれていた兵士が見下げると、双眼鏡が石にぶつかってレンズが粉々になっていた。兵士は双眼鏡を拾い上げると、もう一人の兵士を睨んだ。

「おい!!　なにやってんだ、まったく……」

「おい、あれ……なんだ？」

震える声でそう言われて、兵士はもう一人兵士が指差す方向を見た。ガチャリ——今度は割れるものがなかったので、そのような音がした。2人が見たのは正20面体の光る何かだった。その正20面体は薄い光を帯びていて、透明だった。見る人が見れば、水晶を連想しただろう。そしてその透明な囲いの中には騎士がいる。ゆっくりと体を動かした騎士は兵士たちに向かって一步を踏み出した。その瞬間、光の囲いは光る粒子となって風に乗って大嵐に舞った。

そして騎士は兵士たちに向かって人差し指を突きだした。

「もう俺にそんな小細工は通用しない、これが《絶対防^{ベンザ・カバ}御領域》の力だっ……」

便座カバーとは、人生の中でかかせない言葉である、それと便座カバーとイマジ

更新おくれてすみません

お気に入り登録をしてくださっている少数の方

また、この小説をこの話までご覧くださった方に感謝します。

気に入らない点、間違い

楽しかった、面白くなかった

など感想を気軽に重く受け付けています。

ここをこうすればよかったなども書き込んでくださるとありがたいです。

今後ともよろしく願います。

大將はとんでもない紳士です。(前書き)

同時刻、摩天楼司令室にて

大将はとんでもない紳士です。

司令室の巨大な液晶画面に白い騎士と赤く光る女性が背中を合わせて映し出されている。マッケンバウアー大将はその様子を満足そうに見つめていた。灰色の竜の皮のイスに深く腰掛け、利き手で不ぞろいな髭を撫でていた。マッケンバウアー大将は先ほど下仕官に入れさせた紅茶を口に含んだ。

「こいつは美味しい!!」

透明度の高いその琥珀色の液体を口にした瞬間、マッケンバウアーは思わず声を出した。しつくりと落ち着いた味の中に、まろやかさが表現され、好ましい酸味と気品漂う香りが口中に広がっていく。

「明日から毎朝これにするか……」

もう一度それを体の中に流し込んだ後、ベンザ卿は隣で直立不動のノア大佐に笑顔で紅茶を勧めた。

「君もどうだね？ 世界で一番すばらしい飲み物だよ？」

「いえ、私は結構です」

本来上官からのこのような誘いは断り辛いもののだが、ノア大佐はその誘いを何所吹く風かと、キツパリと誘いを断った。ノアはコーヒー派の人間だった。そんな葉っぱ汁のどこが美味しいのかとそれが本音だった。それにマッケンバウアー大将はノアがコーヒー派の人間と知っていて声をかけている。もう10年も上官と補佐官の関係なのだ、知らないはずがない。大将からすると黒豆汁のどこが美味しいのかと、2人の好みは正反対だった。

マッケンバウアーはやれやれと小息をもらすと、残りの紅茶を飲み干して、椅子に沈んだ体の重心を少し移動させた。

「ノア大佐？彼女のほうはどうかね？」

「先ほど本体の居場所がつかめました、摩天楼から東に13キロの地点です」

それを聞いた瞬間、マッケンバウアーは野性的な笑みを浮かべノア大佐に目を向けた。ノア大佐はこの司令室に入った瞬間から直立不動で、動いているのは目蓋程度だ。マッケンバウアーはこの機械のような部下を大いに気にかけていた。

「なら早く捕まえてきてくれ、そして私の前に引きずりだすんだ」

「ずいぶんマラサイに執着なされていますね？」

珍しくノア大佐が話に興味を示した。マッケンバウアーがノアに向かつてする話はいつもとても下らない話か、とんでもなく下品な話の2択で、聞き手のノアもスルーorスルーの二択だ。マッケンバウアーは欲望に燃える眼球を大きく見開いた。

「私は美しいものを集めるのが趣味なんだよ、それに玩具もね」

ノアはその下劣な笑みを横目で刺しながら、冷静に言葉を選んだ。

「玩具なら貴方の個室に大勢いらっしゃるではないですか？」

「もう全部飽きてしまったよ……」

ため息をつきながらそう答えたマッケンバウアーを横目に「だろうな」と、ノアは内心そう呟いた。彼の個室から持ち出される黒い

袋は日に日に増えていた。そしてその中身を極秘に処理するのはノアの仕事だ。そろそろ新しいものをほしがることは予想できていた。

「あれほどは天界にも人間界にもいない、小生はぜひ彼女を手に入りたい」

『美しい女性』

その点については珍しくノア大佐も同意だった。

ノアが初めて彼女の姿を目にしたのは10年前、冥界、天界の貴族、王族が集まったの、パーティ会場だった。当時19歳で少尉だったノアは、マッケンバウアー准将の後を、まるで金魚の糞のようにくっついて回っていた。当時はそのような華やかな場所に呼ばれるのは初めてで、どのように立ち振る舞えばよいかわからなかったためだ。自分にはこの空気は合わない、そのようなことを頭の隅で思いつつも、失礼の無いように常に気を引き締めなければならない。そんなプレッシャーのせいで多めの酒を口にしたせいかわ、はたまた会う人合う人に酒を進めれ断れなかったせいなのか。大量の酒を口にしたノアは完全に酔いが回ってしまい、風に揺られる草木のようにゆらゆらとパーティ会場を歩き回っていた。

見かねたマッケンバウアーが「夜風に当たれ」とテラスを指差したので、ノアはおぼつかない足取りでテラスに向かった。

その場所には先客がいた。

腰まで伸びた真紅の髪は月光に照らされ輝きを増しており。背中を大きく開いた赤のロー・バックのドレスからは、真珠のような白い肌を露出させている。つまらなさそうに夜空を見上げているその

顔立ちは、まるで彫刻のように整っていた。

ノアは思わず息を呑んだ。気がつけば吸い寄せられるようにそのシルク背中を凝視しており。すっかり酔いは冷めていた。

それから数分が過ぎただろうか、急に肩に重いものがのしかかりノアはギョツと背筋を震るわせた。

「君も美しいと思うだろう？ 冥界人は年を取るのがとても遅いんだ、あれでも私の数倍年上だよ」

何かを愛しむ甘い声と共にノアは肩にかけられた手に力が入るのを感じた。

「もし彼女を手に入れることができたなら、その美しさを永遠に楽しむことができる。どんな男でも彼女を一目見れば手に入れたと思う。勿論私も例外ではない……」

マッケンバウアーは食い入る様に彼女を見ていた。そしてノアはその時のマッケンバウアーの視線を今でも忘れることができない。熱く、欲望と野生をむき出しにしたその目を……

（そうだ、あの時と同じ目をしている）

ノアはそんなことを思い出しながら再び腰掛けているマッケンバウアーに目を向けた。マッケンバウアーは勝手かつ一方的にマラサイについて熱く語っていた。

「彼女にはきつと、いや確実に黒のベビードールが似合う。真紅の

リボンで彼女を後ろ手に縛る。彼女はプライドが高いから恐れを知らぬ眼差しで私を睨んでくるはずだ」

ノアが聞いていようといまいと関係のない様子だ。マッケンバウアーは何度か足を踏み鳴らし、さらに熱く自分の願望を語った。

「そこで小生の出番だ。彼女にたっぷりと教えて差し上げるのだよ、自重というものを、女性の品というものを。最初は反抗するかもしれないが、それはそれでとても楽しい趣向だ。2, 3回もすれば静かになる、私の命令を素直に聞くようになるのだよ、これが支配というものだ」

熱烈にそう語り終えると、一人うんうんと頷いた。

「どうだね？ 彼女を手に入れた時には、君にも私が『それ』をすました後に、部屋に送り届けようじゃないか？ きっと楽しめると思う」

一瞬の間をおいてノアが答えた。

「結構です大将」

「まったく、つまらん男だ」

（クソっ！！）

ノアは心の中でそう悪態をついた。それはこの変態野郎に対してでは無い。自分に対してだ。マッケンバウアーの下劣な誘いに対して、一瞬でも答えを考えてしまった自分に。

そんなことを考えながら

今は他にやるべきことがあるだろう、と自分に言い聞かせ、ノアは目の前の巨大画面に集中した。画面に映し出された2人は先ほどから、何やら話し込んでいる様子だ。

「ラブラブの2人には悪いがそろそろ終わりにしよう」

マッケンバウアーは椅子の肘掛に置いてあったマイクを口に近づけた。

「さあ何か遺言はあるかね〜？」

マイクを通して、マッケンバウアーの声が摩天楼中に轟き、全部隊に緊張が走った。マイクを切ったマッケンバウアーは、無言で手を2度前に振って一斉攻撃の準備をさせる。ノアが再び画面に目を向けると、2人の会話はさらに熱を帯びてきているように見えた。

「やつらが何を話しているか聞きたい」

マッケンバウアーは下士官に合図を送り、マイクの感度を上げさせた。先ほどまで蚊の鳴くような雑音だったそれが、まるで自分が彼らの隣で声を聞いているかのごとくクリアに耳に届いた。

「そんな時間は残っ……いない」

「しかしこのままでは蜂の巣です！！それにベンザ卿……」

「あんなものはかすり……そんなことより君は大丈夫なのか……」

「これは幻影です。私は……場所にいます！！そんな……今はいい

ですベン……」

「そうじゃない、……しなければ君が捕まってしまう」

「そんなことよりベンザ卿のほうが心配です!!」

多少ノイズが入ったものの会話の内容は9割がた理解できただろう
マッケンバウアーはカップルを茶化すかのような目で2人を見つめた。

「熱烈だねーまるで私が悪人みたいだ。そう思うだろ？」

この問いに対してノアは『はい』でも『いいえ』なく、『聞こえなかったことにしよう』という第三の選択肢で対応した。

「私を信用してくれ、安心しろ秘策がある。だから今は自分のことを考えなさいマラサイ」

「面白いことを言うじゃないか？ 秘策？ 実に面白い!!」

マッケンバウアーは『フンツ』と鼻で笑うと、ゆっくりと立ち上がった。鬼火のように揺らめく瞳はしっかりと画面の中のベンザ卿を捕らえており、まるで今から捌きを与える全知全能の神のような立ち振る舞いで、右手を天井に向けて突き上げた。

画面の2人は話し合いが終わった様子で、やがてマラサイの幻影が蝋燭の火ように切なく消えた。マッケンバウアーは再びマイクのスイッチを入れた。

「秘策ね。ベンザ卿君は嘘が下手だな」

低く冷たい、まるで氷のような声だった。

「よく言われるよ」

間を置かずにベンザ卿が鼻で笑いながらそう返事をした。それを聞いたマッケンバウアーは満足そうな表情を浮かべて、口の端をつり上げた。マッケンバウアーが腕を振り下ろした。

『パチン』

指の鳴る音が司令室にこだました。

大將はとんでもない紳士です。（後書き）

評価をポチットしていただけると幸いです。

面白くなかった、ここが悪い

面白かった

作者の励みになりますなんでもお書きください。

やったか!! ↑やってない

「もう俺にそんな小細工は通用しない、これが《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}の力だっ……」

クレータを囲む天界軍の兵士たちは思わず後ずさった。兵士たちは新たにもたらされた新兵器、『ソゲブ』の力を当てにして完全に勝利を確信していたのだ。しかし現状はどうだろう、我々の宿敵は無傷でこちらに向かって牙を向けつつある。現場の兵士たちに動揺が走った。

「たっ、隊長!! なぜ奴は無傷なのですか!!」

「この弾薬で奴に決定打を与えられるはずでは!!」

「だまれ!! その臭い口を開く余裕があれば目標を攻撃しろ!!」

うろたえる兵士たちは現場の隊長に疑問をぶつけるが、司令部からもそのような情報はもたらされて無いのだ。そんなこと一部隊の隊長が答えられるはずも無い。隊長はその歴戦の勇士たる気迫で部下たちを恫喝すると、目標に対して引き続き攻撃を加えるように命令した。

気を持ち直した歩兵たちは、ライフルを再びベンザに向けて引き金を絞る。

「無駄だ、《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}」

ベンザ卿がそう吠えたと同時に弾はベンザ卿に着弾した。いや正確にはベンザ卿の展開した《絶対防^{ベンザ・カバ}御領域》に阻まれたのだ。弾はベンザ卿の数センチ手前で光の壁に阻まれ火花を散らした。

「この弾は、魔術を無効化するはずだろ！！」

「知らねえよ！！　とりあえず撃て！！」

幾重にも張り巡らされた弾幕がごとく弾き返され、兵士たちの足元には虚しく葉^ハ茨の山だけが積み重ねられてゆく。弾丸はまるで線香花火のように激しく火花を散らし、そして儚く地面に落ちていった。

歩兵隊の隊員たちの顔に恐怖の色が浮かび始めた。それは部隊を指揮する隊長たちにも伝染し、必死に司令部に支持を仰ぎたてた。それを目撃した兵士たちの士気はさらに下がる。自分達の上官はインカムに向かって怒鳴り散らすだけで、目前の脅威に対して何の解決策も提示してくれないのだから。

純白の騎士は確実に兵士たちに向かって歩みを進めている。兵士たちはその騎士が、自分たちの命を刈り取る、白い死神に思えた。

「雑兵ども！！　道を開けろ！！」

そんな中、歩兵隊の後方から、怒声が飛びこんできた。兵士たちが後ろを振り返ると、一列に並んだエンジェルの1個中隊が前線の近接砲火に加わろうと爆進してくる途中だった。歩兵は踏みつぶされまいと、一斉に脇に飛びのき、彼ら専用の道を開けた。

「ハッ、40？で粉々にしてやるぜ！！」

クレータのふちに整列した4 mの機械兵器は腕に装着された40
? チェーリングンの黒鉄を、周囲の者たちに「ギリリ」と見せつけた。

それを見た周囲の兵士たちはあわてて地面にうずくまり、両手で
耳を塞いだ。こんなものをこの距離で発砲されたら、確実に耳が一
生使い物にならなくなるからだ。

「空中艦隊による《戦術爆撃》を要請。『アークエンジェル』に《
CAS》（近接航空支援）をさせろ」

エンジェル中隊の指揮官が無線越しに航空支援を要請し、司令部
は二つ返事でそれを承認して各部隊に攻撃の準備をさせる。司令部
からの通信を受けたアークエンジェル達の行動は素早かった。空に
散らばる黒い影の並びが秒感間隔で変化していく。自分たちの攻撃
に一番適した位置、仲間を火線に巻き込まない最適な攻撃角度を計
算しているのだ。

同時に空中に浮かぶ戦艦と砲撃陣地に陣取った砲火部隊も戦術攻
撃の準備を整えた。敵までの距離、風向きを計算して砲塔に角度を
つける。それら一連の動作が20秒としないうちに済まされ、中隊
長のインカムに「準備完了」の通信が届けられた。

「今だ、やれ!!」

火薬庫に火を放ったような音が地面を揺らした。エンジェルの4
0? チェーリングンが断続的に光を放ち、曳光弾が光の筋を描いた。
空からアークエンジェルが《電磁投射砲》と《荷電粒子砲》の光の
シャワーを浴びせかける。光のシャワーは地面に不規則な縫い目を
描きながら、ベンザに肉薄するが、それも歩兵たちの銃弾と同じ運
命をたどった。

上空から放たれた数万発のケースレス弾とエネルギー弾、それとすべての地上攻撃は20面体のシールドに見事に蹴散らされた。シールドに直撃した弾丸は砕け散り、最後に紅蓮の曳光を咲かせながら消えてゆく。その圧倒的な様子は、皮肉にも兵士たち目に幻想的に映った。

「畜生っ」

エンジェルのパイロット達は悪態をついた。これではまるで子供の水遊びである。自分たちが行っている攻撃はビニール傘を構えている人間にホースで水を撒いているに等しい。

（本当に勝てるのか？）

そのような疑問が兵士たちの頭に過った瞬間。風切音と共に戦艦の砲弾が着弾した。さきほどベンザ卿を地面に埋めたのと同じサイズの砲弾だ。

爆風と爆音、そして気圧の急激な変化により地面の歩兵たちは全員耳を押さえて地面に伏せた。さらに数十発の砲音が大気を揺るがし、ベンザ卿を黒煙と爆炎が包みこんだ。

数十本の火柱が立ち上り、同時にガラスの割れるような音が周囲にこだました。

「おい！！　今の音！！」

興奮した様子で一人の兵士が叫ぶ。

「砲弾がバリアを貫通したんじゃないか!？」

その一言に周囲の兵士から歓声が湧き立った。

「たしかに、そんな感じの音だったぞ」

「ついにやったか!!!!!!」

「馬鹿者!! 敵の死体を確認せずになにをはしゃいでいる」

はしゃぐ部下を叱りつける隊長達。しかし隊長もこの時ばかりは笑みがこぼれた。決定打ではないかもしれないが、奴に何らかの打撃を与えたことが確信していたからだ。

兵士たちが勝利の可能性を見出し激高する中、そいつは突然やってきた。

衝撃波――

姿勢を低く構えていなかった兵士たちが、勢いよく地面を転がる。射撃中だった《エンジェル》達もバランスを崩して尻餅をつき、上空を飛翔していた《アークエンジェル》はクレターの外に向けて大きく流された。

空中戦艦ではブリッジの強化ガラスに亀裂が走り、船が大きく揺れた。

「何が起きたんだ」

地上の兵士たちは口々にそう叫びながら負傷した仲間に関を貸す。今の地上はまるで野戦病院のように、負傷者とそれを介護するもの

がごった返している。衝撃波により地面を50m近く転がった兵士は両足を骨折しており、泣き叫びながら後方に引きずられていく。

一部では倒れた《エンジェル》に体の一部を挟まれた者がおり、決死の救出活動が行われている。部隊長は負傷者の回収に《アークエンジェル》を派遣するよう司令部に通信を送るが、全ての無線機は使い物にならず。隊長はガラクタを怒りのまま地面に叩き付けた。そばにいた通信兵の顔が真っ青になったが隊長は気が付かない。

その時隊長の目に一人の兵士が映った。先月入隊したばかりの新兵だったが、実に優秀な男だ。その優秀な新兵が今、地面にへたり込みぶるぶると震えているのだ。隊長はすぐさま彼に駆け寄った。

「どうした!! 貴様もどこか怪我をしたのか?」

彼は不気味なほど首を横にふった。

「ならどうした!? そんな所でへたり込まずに貴様も兵士の救護活動に加わらんか!!」

兵士としてあり得ぬ態度の新兵に立腹する隊長だったがそれを見た新兵は脅えながらクレーターの方向を指差した。隊長もその方を向きそして

言葉を失った――――

周囲の兵士たちも隊長を見て、同じ方向に顔を向ける。

黒煙の中をゆらゆらと揺れる影が見える。大きさは3メートルを超えているだろうか。人にしては大きすぎる。

すこし、また少しと時間が進むにつれて煙が薄くなっていく。所々で物を落とす音が聞こえた。中には悲鳴も混じっており、運搬中の負傷者を落とした者もいるようだ。兵士達は人影に目を奪われ、じりじりと後ろに下がっていく。

今まで騒がしかった、うめき声や叫び声も一切聞こえない。静かすぎて10歩先の兵士が、カチカチを齒を鳴らしている音まで聞こえる。

20秒もすればその影ははっきりと、クレターの外からでも形が見えるようになっていた。見えたのは人影だ。腕らしきものが確認できる。当たり前といえば当たり前である、この攻撃を耐え抜くのは人でもエンジェルでも不可能だ。人やエンジェルならまず形がなくなるだろう。

なら答えは奴しかない。しかしこれ矛盾している。ベンザ卿は化け物だが身長は3mも無い。煙がさらに薄くなり、その答えがはっきりとした。

兵士たちは一斉に息を呑んだ。

影の正体はたしかにベンザ卿だった。ここまでは予想と同じだ。が、その他の光景は異様なものだった。全身が赤いのだ。今まで純白の鎧を身に着けていたはずが、その色が深紅に変わっていた。

それとベンザ卿は何か巨大な物を抱えている。それで影が大きく見えた。そしてそれはマグロのような形をしている。兵士たちは一瞬でそれが何かを理解した。

砲弾であった。

戦艦から撃ち出された、人とは同じサイズの砲弾である。ベンザ卿はそいつを肩に担ぎながら、さらに深く掘られた穴の中で仁王立ちしていた。

「私には時間がない……お前たちと遊んでいる時間はないんだ!!」

ベンザ卿の咆哮が轟いた。

やったか!!↑やってない(後書き)

投稿が不定期ですいません

今週はまた投稿できると思います。

おもしろかった。ここがダメだった。など感想をいただけるとうれしいです。

読者様の声があるとモチベーションがあがります。

お気に入り登録をしてくださっている読者様も

たまたまこの小説を開いてこの話まで読んでくださった方も
本当にありがとうございます。がんばって更新します!!

良い子には真似しないでほしい

ベンザ卿が砲弾を担いでいるのには理由がある。それはもちろん先ほどの攻撃の最中のことだ。

雨のように降り注ぐ砲弾とその爆炎。その両方がベンザ卿を襲うが《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}がそれらからベンザ卿を完璧にまもっていた。ベンザ卿は自分が籠の中の鳥のような気分だったが、この際こちらの方が幸運だったと考え直す。

耳を覆いたくなるような音と共に自分のすぐ手前に砲弾が着弾した。砲弾は地面を抉り取り、小石やその破片を爆発の勢いをベンザ卿に押し当てたが《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}を少し揺らした程度だった。

（よく耐えてくれる……が、直撃はさすがにまずいか……注意しなければ）

爆炎の熱で《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}の中の温度も徐々に上がってきている。ベンザ卿は額の汗を腕で拭うと。眼前の光景に再び目をやった。そんな時視界の隅に一筋の光が飛びこんできた。

流れ星———そう思ったかったベンザ卿だったが、そんな偶然あるわけもなく。その光はベンザ卿めがけて一直線に飛来してきた。光を砲弾と認識した時には手遅れで、すでに回避は間に合わない状況だった。戦艦から放たれた人ほどの砲弾が、運悪く《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}に直撃した。

今までどのような攻撃にも絶対的な拒絶反応を示していた《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}が、その時だけまるでガラスの壁ようにあっさりとそれ

を通した。氷が碎かれるような音と同時に《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}の一部が決壊してベンザ卿に鋼の塊が迫った。

鼻先に迫った破壊の象徴をベンザ卿はほぼ本能的に砲弾を両手で掴んだ。いくら《カオス》の力を得ていようと、これは奇跡に近い。

ベンザ卿は驚きの表情を浮かべる——時間もなく砲弾との格闘が始まった。

高速で回転する砲弾の頭を両手で押さえ、必死で回転を弱めようと試みる。小手が高熱で真っ赤に染まり、両手から鮮血が溢れ出した。どうやら《ソゲブ》を無効化できるのは新たな力、《絶対防御領域》^{カバ}だけらしく、それを突き破ったこいつは十二分にベンザ卿を殺傷できる力があるらしい。砲弾の回転で、周囲に鮮血が撒き散らかされ、一面を赤の世界に変えてゆく。ベンザ卿は返り血で半ば真っ赤になりながらも、さらに両手に力を加えた。

「うおおおおおっ!!!!!!」

悲鳴の混じった怒声を上げながら、自分の中に眠るすべての力を解放させる。体中の関節が、痛みという名の拒否反応を示したが、無理やり従わせる。

バリバリツツ——

風穴の開いた《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}に蜘蛛の巣のように亀裂が走ってゆく。ベンザ卿は大きく目を見開いた。

全身から力が泉のように溢れ出てくる。胸の中心が光を放ち、全

身から光の粒子を放った。重力から解放されたベンザ卿は、まるで水中にいるような感覚を覚える。

刹那——光が全てを包んだ。

（ベンザ卿……全てを解き放ち私と同化せよ）

突如男の声が耳に滑り込んできた。マッケンバウアーでは無く、今までに聞いたことのない声だ。

（誰だ！！）

（私は……お前……お前は私）

（！？）

その一言を最後に声は突然聞こえなくなった。激しい光が視界を包み、ベンザ卿は思わず目を閉じた。全ての音が聞こえなくなった。ベンザ卿の力に耐えきれなくなった《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}が崩壊する。外に一気に溢れ出した力は衝撃波となって周囲に拡散し、津波のように周囲の物を飲み込んだ。

止まった——

ベンザ卿の体から力が抜けた。膝をついて荒い呼吸を行い、同時に両肩のショルダーアーマーが激しく上下に動いた。周囲は舞い上がった土煙と砲弾の黒煙により澱んだ空気を漂わせており、周囲からの視線を完全に遮断している。ベンザ卿は完全に沈黙した砲弾を

腋に抱え、口端に笑みを浮かべた。

私は生きている――

ふと自分の体におとすと、純白の鎧が鮮血で染められていた。この量は完全に致死量である。医学の知識がないベンザ卿だが。人がどの程度の血を失ったら死ぬのかは、何度も戦場で目にして感覚的に知っている。手に目をやると驚いたことに傷はすでに塞がりつつあった。赤い瘡蓋が鱗のようにこびり付いている。ふと思いつくと、先ほどから体の痛みが感じられない。

あれだけボロボロだったのに――

「まったくどうなっているんだこの体は……それにさっきの声は……」

そんなことを漏らしながら自分の寿命について考える。先ほどの攻撃から立ち直りは早かったつもりだ。あと5、6分の寿命はあるはずだ。いや、先ほどかなりの体力を消耗したからもっと少ないかもしれない……本当にそれだけの時間で彼らをかき分け、あのいまましい塔を折ることができるのか。

（いや惜しい……）

ベンザ卿は砲弾を肩に担いで立ち上がる。

（このようなことを考えている時間自体が惜しい）

辺りに立ち込めた黒煙が薄くなり、周囲の雑兵を浮かび上がらせた。雑兵たちは皆恐怖で顔を強張らせている。中には腰を抜かして

いるものまでいた。

「私には時間がない……お前たちと遊んでいる時間はないんだ……」

良い子には真似しないでほしい（後書き）

おもしろかった。ここがダメだった。など感想をいただけるとうれ
しいです。

読者様の声があるとモチベーションがあがります。

お気に入り登録が増えておりました。

ありがとうございます！！

ついでに評価も押していただくと感激です。

明日もがんばって更新します！！

温水洗浄ベンザ

「まずはお礼をしなければ」

右手に砲弾を持ったベンザ卿は一人声を漏らす。今天界軍の所有する兵器の中で一番の脅威が空中戦艦でありその主砲である。他の小型兵器は《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}には傷一つ付けることができない。しかし戦艦の主砲は別格である。命中率が極端に低いとはいえ傷どころか《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}を貫通させている。これは確実に破壊しなければなるまい。しかし全ての相手をしている暇はない、一定数数を削って摩天楼の破壊に向かわなければ時間がない。一隻に1分もかけられない。

「10秒だっ!!」

ベンザ卿は戦艦に背を向けて少し屈みこんだ。右足で強く地面を蹴り、同時に体を捻る。体に回転を加えて、右手に持った砲弾を力強く戦艦に向けて押し出した。勿論音速を超えて押し出された砲弾は、周囲に波紋のソニックブームを巻き起こしながら、まるで何かに吸い寄せられるように、持ち主のもとに帰っていった。

ゴウンッ、と重たい金属音が聞こえた。

空を見上げれば、1隻の戦艦が中央の動力部から火柱を上げて急速に高度を落としていく。

「ゴミはちゃんと家に持って帰るんだ」

そう吐き捨てたベンザ卿は視線を次の獲物に切り替えた。素早く

地面を2度蹴り、空高く舞い上がる。それに驚いたのは残りの艦隊は《近接防衛火器システム》フアンランクスを作動させベンザ卿の撃墜を試みた。

六本の砲身が竜巻のように高速で回転し、20mmの弾を盛大に吐き出した。世間ではバルカン砲と呼ばれる恐ろしい兵器だ。放たれた炎の線は鞭ようにうなり、宙をかき混ぜた。1隻ならまだしも25隻の戦艦が同時にそれをしたのだから空は当然大変なカオス空間となった。摩天楼上空は火器の曳光と爆炎で真っ赤に染められ、空なのに火の海という表現が、とてもその場の惨状を表すのに適しているように思えた。

一方ベンザ卿は、敵艦隊が一斉にそのようなことをしたため人工の火災旋風かさいせんふうの中に単騎突っ込むような形となった。しかしベンザ卿は驚異的な反射と素早さで全ての火線を掻い潜る。同士討ちを恐れ《アークエンジェル》は戦艦にコバンザメのように張り付き離れようとしなない。これはベンザ卿にとって好都合だ。ベンザ卿は空中で見えない壁を水泳のスタートのように思い切り蹴り付ける。空気の炸裂音と共に自分自身が弾丸となり戦艦に突貫する。標的となった戦艦の《近接防衛火器システム》フアンランクスがそれに反応してベンザ卿の予測進路に素早く弾幕を張った。

一陣の風となったベンザ卿は脆弱な《近接防衛火器システム》フアンランクスをあざ笑うかのように右手を正面に突きだし叫ぶ――

「《絶対防衛領域》ベンザ・カパー」

薄い光を帯びた正20面体が一瞬で周囲に展開せず。光の盾がベンザ卿を包まなかった。

「はぬっ!!」

馬鹿のような声を漏らした瞬間20?の弾丸が脇腹を掠めて、赤い線が流れた。傷自体は一瞬で塞がったが、その痛みに悶絶しながらなんとか前に足を突き出した。足は本来何もない場所に何かをとらえ、ベンザ卿はそれを踏み台にして体を反転させる。それとほぼ重なるタイミングで先ほどまで体があった位置にバルカンが襲いかかった。

20?ソゲフ弾が虚空を刃のように切り裂いてゆく。ベンザ卿は今までとは一転して余裕の表情を崩した。

(《絶対防^{ベンザ・カバ}御領域》が展開できない!! 先ほど崩壊したのが原因か。まあ理由はそれしか考えられない。再度使用に時間を要するか……それとも2度と使用できないか……)

ベンザ卿は頭の中でスイッチを切り替える。今まで使用できた絶対的な盾は使用できないのだ。戦場では状況に応じて臨機応変に戦い方を変えなければ死が待っている。

(懐に潜り込みたいが、今の状態では無理だ。かといって遠い間合いは明らかに不利だ)

ベンザ卿に遠い間合いの攻撃手段がない訳ではない。《^{フレイム・フィンガースナッチ}炎の指パツチン》や《^{ホイツスル・ブレード}口笛の刃》はどちらも強力な技だ。しかし巨大な戦艦に対しては。《^{フレイム・フィンガースナッチ}炎の指パツチン》では小火程度の効力ぐらいしか望めず。《^{ホイツスル・ブレード}口笛の刃》の空気の刃ではあの分厚い装甲を切断するのは不可能だろう。

狼のように集団で襲い来る弾丸を、側転の回転運動で踊るようにかわしながらベンザ卿は契約時にマラサイが自慢げに語っていたこ

とを思い出した。



「はあ、大体のことができます。14歳ぐらいの少年があこがれている大体の能力が使えます」

「目からビーム」

ベンザ卿はとっさに思いついた能力を言った。

「できます」

「手からエネルギー弾」

「初期装備です」



楽しく語り合った1時間前のことを思い出す。

（試してみるか……）

ベンザ卿は両目をこれでもかというほど見開き、憎き空中戦艦を睨み付ける。が、すぐに目を擦ってやめてしまった。

（痛そうだからエネルギー弾にしよう……）

情けないように思えるがみなさん想像してほしい、目に見えない埃さえ激痛の元になるのだ。そのようなデリケートな部分からレーザーを発射しようというのだから、皆さんもベンザ卿と同じく背筋が寒くなったはずだ。

そんなくだらないことを考えている間にベンザ卿はさらに追加で飛来した数百発の弾丸をヒラリと回避すると、左手で右肘付近を支えながら手の底を一番巨大な戦艦に向けた。全身の感覚が鋭くなり、体中から熱い物が右手に流れ込んできた。

デカいのがくるな——そう感じ取った瞬間、ベンザ卿はとっさに思いついた言葉を発した。

「《ウォッシュ・レット荷電粒子砲》」

ベンザ卿の右手が十字の輝きを周囲に放った。その恒星のような煌きと流星のように尾を引く残光が兵士たちの瞳に焼き付けられたのと同時に。光の線は戦艦の横っ腹を貫いた。

ベンザ卿は反動で対角線上に少し流されながらも、そのあまりの威力にため息を漏らした。戦艦は撃たれた側と反対の側の面から紅蓮の光を漏らし戦艦の部品を宙に四散させる。その数秒後に炸裂音がベンザ卿の耳に遅れて届いた。

戦艦は空から退場していく、どうやら動力炉を撃ち抜かれてもそのまま落下しないように設計されているらしく、その鉄の塊は小型の山のような大きさを見せつけながらも、ようにゆっくりと地面に

向かっていく。その姿はまるで海中を遊泳するクジラのようなようだ。

ベンザ卿は確信を持ち宙で跳躍する。空気の抵抗を少なくするため腕を折りたたみ落雷のような多角的な直線機動で《近接防衛火器システム（ファンランクス）》を翻弄する。

（一隻一隻潰してでは時間が足りない）

腕は2本あるのだ。効率的に使用しなければならない。ベンザ卿は両手を突き出し急降下で戦艦の下に潜り込む。そして反転をかまして空中静止する。下に潜り込んだのは攻撃で2次被害を出さないため、静止したのは動いていると正確に狙えないからだ。

「《W・荷電粒子砲》」
ダブル・ウォッシュ・レット

2本の光線が発射されて、2隻の戦艦を一瞬で鉄くずに変える。先ほどと同じように2隻の戦艦が大地に向かって沈んで行く。その光景を目の当たりにした戦艦はさすがに危険を感じてベンザ卿の周辺から離脱してゆく。

密度の濃い弾幕に明らかな向抜け穴できた。ベンザ卿がこの隙を見逃すはずがない。空宙を三回に分けて蹴り、一気に音速に加速する。もうおなじみとなったソニックブームをまき散らしながらベンザ卿はその抜け穴に向かって飛び込んだ。

全身を衝撃が突き抜けた。

砲火の穴を掻い潜る途中、何かが横っ腹をえぐったのだ。ベンザ卿は弾に当たったのかと思ったのだが違った。苦痛で歪めた顔を脇腹に向けた時あるものを見たのだ。

足だ。腰だ。胸だ。腕だ。頭だ。

（こいつは……）

グラつく意識で必死に頭を働かせた。

（人だ！！！！！）

空中に浮いていたのは男性だった。金色の髪をオールバックにまとめ、瞳の奥では銀色の炎をこれでもかとはかりに燃やしている。間違いなく天界人だ。ベンザ卿と同じく空中に佇む男は、瞳の炎とは裏腹に氷のような視線をベンザ卿に突き刺し、薄く口を開いた。

「貴様に個人的な恨みはないが任務なのでな、ベンザ卿」

男の格好は実に奇妙だ。体は赤い鎧で覆われているが、その鎧の関節部分は、生の筋肉の繊維のような物が露出している。まるで筋肉と鉄で出来た鎧を着込んでいるようだ。背中には4枚の銀の羽を生やしており、その羽から光の粒子が放出され推進剤になっているようだ。

「こちらから名乗らせてもらおう、私の名前は《ビンセント・ノア》、親衛隊隊長、階級は大佐だ」

温水洗浄ベンザ（後書き）

誤字脱字の指摘もありましたらお手間ですがご連絡ください。

今週はまだ頑張る！！

鬼畜大将の悪魔のレッスン 女性士官恥辱尋問 R 18

「はわわわわわわわわわ」

指令室で動揺の声が上がった。声の主は男性で、指令室の中央にある椅子に腰かけて、子猫のように震えていた。男は口ろくに手入れもされていない赤茶の顎鬚をたくわえ、グリースで茶色に輝くオールバックの髪型は一見、だらしない狸に見える……そうマッケンバウアー大将だった。

「小生ということがなんたる失態！！ 私の責任で戦艦が3隻も沈められてしまった」

慌てふためきながら、腰かけていた椅子から立ち上がると椅子の周りを一周する。そして椅子に座る。数秒間ガタガタ震えるとまた立ち上がり椅子を回って座る。そんなことを繰り返している。周囲で彼を見守る下士官はなんと声をかけていいか混乱しており皆互いに困惑の表情を向けていた。

「くおおおおおお」

マッケンバウアーは両手で自分の顔を覆うと、椅子から降りて汚らしい床に両膝を落とした。指の隙間から涙が流れ、こけた頬をつたって床に落ちた。

「閣下、お許しください、この責任は私にあります。全て私の責任なのです」

そう言って悲しみに濡れた声を天井に向けた。左手で心臓を握りしめ、右手を天に掲げる。そんな体勢が10秒は続いたのだろうか。見かねた下士官が声をかけようとした瞬間だった。

「どうだ、今ので？」

ポーズはそのままマッケンバウアーから声を掛けてきた。

「は？」

下士官は素で声を上げた。勿論頭上には大きな疑問符つきだ。

「いや、あれぐらい反省したら今回も、元老院や閣下はゆるしてくれるかと聞いているんだ」

「はあ？ 私にはさっぱり」

先ほどと変わらぬ表情で下士官は首を傾けた。それを横目で確認したマッケンバウアーは小さく鼻を鳴らす。

「冗談が理解できん奴だな」

口端を釣り上げて、ギラリと微笑むマッケンバウアーを見て下士官たちに冷や汗が浮かぶ。その間に彼は「よっこらせ」とわざと爺臭い言葉を吐きながら椅子に腰かけた。その表情はカラリとしており、先ほまでの感情的な表情は完璧に乾ききっていた。しかしそれもそうだろう、この男が戦艦3隻程度失ったぐらいで動揺するはずがないのだ。この男の世界は自分の喜怒哀楽が中心で回っている。

先ほどもそうだった。この男は黒煙の中から浮かび上がるベンザ卿を見て歓声を上げたのだ。その時指令室の全員がマッケンバウアー

ーに視線を送ったが彼はお構いなしだ。まるで自分の友人が生還したかのように跳ね回り、心から神に感謝しているとまで叫んでいた。彼からすれば全てがゲームなのだ。そして彼の部下は皆、自分がポーンだということを自覚している。そんな上官に誰も文句一つ言わず従う理由は、彼がゲームで負けないから。天界の運命を握るあの敵も、マッケンバウアーにすれば敵ではなく今の自分を満たしてくれる対戦プレイヤーなのだ。おそらくこの男はろくな死に方をしないだろう、自分でよく口になっている。きっと彼は額に拳銃を突きつけられても最後まで嘲笑しているに違いない。

下士官たちはそんな大将の立ち振る舞いを確認すると自分の持ち場に戻ってゆく。最近では皆、マッケンバウアーの対処方はノア大佐を見習うことにしている。あまり関わらないのが自分の将来のためだ。

辺りを見渡したマッケンバウアーは人差し指をクイクイと折り曲げ、女性士官を呼びつけた。腰回りに女性らしく肉がつきながら、締まるところは締まっている美しい女性士官だ。年齢は30代半ばだろうか。士官は膝を折りマッケンバウアーに視線を合わせ、赤い眼鏡の縁をクイと持ち上げ話を聞く体勢を整えた。

「ノアちゃんどこ行ったよ？」

片方の眉は吊り上っているがその口元はじつとりと曲がっている。女性士官は自分の太ももに手があてがわれる感覚を感じて身を震わせた。

「あっ……あの大將……」

大将の湿った右手はももを這い上がり、肉厚の尻をわしづかみに

した。女性士官から小さな悲鳴が漏れたがそれはマッケンバウアーの男心をくすぐっただけに終わった。

「どうしたのだね？早く報告を頼む小生が気が短いことは知っているはずだ？」

マッケンバウアーそんな女性士官を見下げると、舌を動かしそのねっとりとした唾液で唇を湿らせた。士官は頬を桃色に染めて口を開いた。

「わかり……ました」

女性士官は素早く大将の右手を捻りあげ、右足のつま先をヒールの踵で踏みつけた。

「ノア大佐は先ほど自ら出撃なされました」

女性士官がオペレーターに視線を向けると、それまで戦艦を映してた指令室の画面が切り替わる。一瞬の目を覆いたくなるような光の後映ったのは空中で対峙するノアとベンザの2名だ。それを目にしたマッケンバウアーはついに声を出して笑った。左手で膝を叩いて大笑いである。周囲の視線が突き刺さったが、無論マッケンバウアーはそのようなことを気にする玉ではない。

「おいおいノアお前、俺のことを殺戮者や戦争マニア、とか散々言いながらよ……！」

少しすると「ヒッヒ」と笑をこらえてと肩を揺らしなが画面を指差した。

「たしかにお前の部隊に出撃を命じたが、親衛隊隊長が自ら最前線とは笑わせる。俺の目は正しかった、お前もこっち側の人間だ!!」

マッケンバウアーの笑がぴたりと止まった。まるで時間が止まったようだ。彼からは呼吸の息遣さえ聞こえない。椅子の上で石造のように静まり返り、片手で顔を表情を隠している。静寂のあまりその場の全員が再びこちらに顔を向けた。

「お前も、十分《バーサーカー戦闘狂》だよ、ノア……さあ戦闘を楽しみたまえ」

顔を覆ったその手の間から、狂喜に満ちた最高の笑みが見え隠れした……

「すまん……そろそろ右手を解放してくれ……血が血が……」

大将の右腕は、死体のように薄い青色に変色している。大将はついにタツプをした。

「大将その前に私に何か言うことがありませんか？」

「いいケツだ……ヒグウツゲツ……すまぬ！！！！」

女性士官は鬼神の殺気がこもった瞳で大将を見つめながら、形だけ笑って見せた。そして腕を解放する。

「次はありませんよ、大将どの？」

そう言い残し踵を返して自分の元いた場所に戻ってゆく。大将の右腕に今までの肌色が戻った。マッケンバウアーは人差し指をクイクイと折り曲げ、女性士官を呼びつけた。勿論先ほどとは別人だ。

「ハイ、大将……」

やってきたのは若い士官だ。胸は程よく膨らんでおり、腰まである髪を後ろで縛っている。ポニーテールと呼ばれる奴だ。こちらは美しいと呼ぶのには早く、かわいらしいが正解であろう。マッケンバウアーはそんな士官の肩に手を置いた。

女性士官の体がピクリと震えた。彼女は先月配属されたばかりの新人であった。マッケンバウアーと話すのも今回が初めてなのだが、彼の噂はよく耳にしている。彼の女癖の悪さも、特殊な性癖も。彼女はこれから自分の置かれる状況を想像して恐怖した。そんな中、マッケンバウアーが口を開いた。

「至急に救急キットを頼む……!!」

いきなり力のない声でそのようなことを言われ、ただただ動揺する若い士官であった。

鬼畜大将の悪魔のレッスン 女性士官恥辱尋問R18（後書き）

お気に入り登録をしてくださった方ありがとうございます。

貴方のお気に入り登録で元気が出ます!!

戦場での再会

ノアの挨拶はそれで終わりではなかった。悶絶するベンザ卿目の前に。間隔をあけずに脇腹に踵落としが炸裂し、抵抗することもできずベンザ卿は地面に向かって真っ逆さまに落下した。。

ピシュン――

そんな風切音が聞こえ、ノアはベンザ卿の落下位置に一瞬で先回りした。そして落ちてきたベンザ卿を空中で捕まえると、勢いに任せてベンザ卿の顔面に膝をめり込ませる。兜の隙間から血煙が吹き出し、飛び立った元の大地に、勢いのまま背中から地面に叩き付けられた。背後からの衝撃が体を突き刺し、ベンザ卿は血反吐を宙にぶちまけ、薄れた意識が一瞬消えかけた。ノアは追撃をかけけるべくこちらに肉薄してくる。ぼろぼろの体が身を守るべく無意識に防衛の呪文を呟く。

「クソッ頼む！！」
《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}「

ベンザ卿の願いが神にでも通じたのか、それともただの偶然か、《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}がベンザ卿の周囲に展開された。ノアは直接攻撃を諦め、体を反転させて上空へ駆け上がった。

「すでに対策済みだ」

地面で踏ん張るベンザ卿の耳にそのような声聞こえた。同時に、頭上を深紅の《アークエンジェル》が高速で飛行する。数は12機

と非常に少ないがその動きは通常の《アークエンジェル》の3倍近く素早く、機敏でもある。

「親衛隊の力を見せつけろ、一斉攻撃だ」

「無駄だ!!」

ベンザ卿とノアの怒声が重なり合い。互いを睨み付ける。《アークエンジェル》は素早くベンザ卿を取り囲んだ。深紅の機体の両肩が開き、そこからミサイルが一斉に射出される。ミサイルは緩やかな弧を描きながら薄い光を帯びた正20面体に突っ込んで行った。

衝撃が来ることを予想しベンザ卿は身構えたがその予想は裏切られた。《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}に衝突したミサイルは爆発する事無く、ひしゃげて白い煙をまき散らしたただけだった。

スー——ッ——そんな気の抜けた音と共に吹き出す白いガスが、にらみ合う両者の間を隔てた。

（なんだこれは……毒ガスか？）

そんな考えが一瞬頭を過った。それなら問題ないはずだ。ベンザ卿は砲撃を受けた時、爆粉や爆炎で汚れた空気を自分は吸わなかった経験から《絶対防御領域》^{ベンザ・カバ}は毒ガスに対しても効果があると踏んでいた。

突然の突風が戦場を駆け抜けた。白いガスのカーテンが揺れて上空で待機するノアとベンザ卿の視線を再び結び合わせた。ベンザ卿はその時考えを改めた。ノアは笑っているのだ。奴は何かを企んでいる。そしてその効果に絶対的な自信があるのだ。さもなくば笑うことなどできない。そのようなことを考えたベンザ卿の背筋に突如

悪寒が走った。気が付けば意識が朦朧として、目もかすむ。自分の吐く息が白く……色づいており……

「なんだこれは!!」

ベンザ卿が気が付いた時にはすでに手遅れだった。《絶対防^{ベンザ・カ}御領域^バ》には白い霜が降りており、手先の感覚が失われつつあった。これはあの白いガスのせいだ。

「どうだ瞬間で摂氏-200℃に達する冷凍ミサイルのお味は？普通の生物なら1秒もたないのに面白い体じゃないか？」

寒さを感じたのは最初の数秒、ほんの数秒だけだ。ベンザ卿は「しまった!!」と大きく舌を鳴らした。《絶対防^{ベンザ・カバ}御領域》に断熱効果は無いのだ。ベンザ卿は寒さを感じることなく一瞬で体の自由を奪われてしまった。ベンザ卿は。《^{フレイム・フインガースナツプ}炎の指パツチン》を使おうと、腕に力を込めたが返事がない。それに呂律も回らない。

「貴様のその力無理に破ろうとは思わん。殻に籠りたければ好きなだけ籠ればいい。しかし貴様、もうすぐ寿命だそうじゃないか？なら待とう、私は確実に任務を遂行する」

ノアは懷から砂時計を取り出しで、それを逆さに向けた。赤く色付された砂が重力に従い下の小瓶に積もってゆく。

「貴様の命は約2分だ」

ベンザ卿の頭上で高らかにそう宣言したノアは腕を組んでベンザ卿を見下ろした。どうやらベンザ卿が死んで行く様をこの場所で見学するらしい。ベンザ卿は必死に抵抗を試みた。しかしどこも自分

の命令を聞かない。まるで自分がただの屍のような気分になりベンザ卿は吐き気を催したが、それすらも許されなかった。そのうちにベンザ卿を猛烈な睡魔が襲った。ベンザ卿は以前冒険家から話を聞いたことがあった。雪山で暖をとらずに睡眠をとると、体が凍り付いて睡眠と共に死んでしまうと。しかし今の自分に逆らえそうになり。このまま私は死んで行くのだとベンザ卿は心の片隅でそのようなことを考えた。まぶたが鉛のように重く、まぶたがその重みに耐えきれず、ゆっくりと視界が薄れていった。

そして――ベンザ卿の意識が途絶えた……

（来るぞ）

再び男の声だ。その声は神のお告げのように、自分の心に直接語りかけてくるようだった。

（彼女がくる）

（彼女？）

ベンザ卿は素で疑問符を浮かべた。

（ああ、貴様を愛する人が貴様を助けに来るぞ）

（それはいい……それにお前は……）

（鈍いやつめ、それに先ほど言ったはずだ、私は貴様自身だと。急いだほうがいいぞファルコン・ベンザ、貴様が私になる前に……）

言葉の最後はかすれて、ベンザ卿は全てを聞き取ることができなかった。しかしその言葉が途切れたと同時に突如体に異変が起きた。

尻が痒いのだ。

しかしこれはおかしい話である。今の自分は人間氷像状態で、痒いなどという感覚は感じるはずがない。しかしベンザ卿は猛烈に尻が痒かったし、頬も熱いと感じた。いや、熱いのは頬だけではない。頭も、顔も、胸も、腕も、足も、体全身が熱い。そして嬉しいことにそれを全身で感じている。感覚が体に戻りつつある。そんな喜びを胸に、ベンザ卿は目を開こうと努力した。最初は抵抗していたまぶたも、ベンザ卿の意思に負けて、素直に命令に従った。その時のまぶたは羽毛のように軽かった。

「お目覚めですか？」

太陽のような笑顔がベンザ卿を出迎えた。真珠色の肌と炎のような髪が眩しい、長い髪は動きやすくするためかポニーテール状にまとめれており、肩から流れた尻尾の先端がベンザ卿の顔をくすぐった。身に着けているものは最後に別れた時と同じ、胸元を少し強調した深紅のバトルドレスだ。彼女が少し首を動かしたと時、形の良い小ぶりの胸が弾んだ。まったく……いいおっぱいだ……

「膝枕とは、何年振りだろうか……」

小さく囁いたベンザ卿の頬に深紅の皮手に覆われた右手が添えられる。ルビー色の瞳が自分を見下ろして、ベンザ卿は心の奥を見透かされるような気分になった。

「助太刀に参りましたベンザ卿。次からはもっとましな嘘を考えておいてくださいね」

「まったく私は嘘が下手だ」

子供を叱りつけるようにベンザ卿にピシヤリと言いつけた彼女はにっこりと笑みを浮かべた。それを見てベンザ卿は苦笑した。彼女は先ほどの幻影の姿とは異なり、しっかりとした生命力に満ち溢れている。

「あと変な目で私を見ないでください」

少し頬を染めた彼女に睨まれてしまったベンザ卿はバツの悪そうに顔をポリポリ掻いた。本当に心を見透かされているとは……語る立場からフォローを入れさせていだとこれは完全にベンザ卿は無実である。悪いのはいいおっぱいの方だ。あんないいおっぱいが眼前にあれば見ない方が失礼であると個人的に……

とりあえず、そんな中ふとベンザ卿は膝から頭を上げるとキョロキョロと自分の周りを見渡した。何故なら先ほどもで戦闘をしていたはずだ。先ほどから敵の攻撃の気配が無いのだ。ならどうやって彼女は自分を助け出したのか、その方法が気になったのだ。

今ベンザ卿達の周囲は炎のカーテン、いや壁と言ったほうが正しいだろう物に囲まれ熱気が立ち込めている。壁の近くはただならぬ熱さに達しない。体を包んだ氷が解けたのも納得である。さらに周囲をよく見ると、大量の白色の破片とそれに交じって赤色の破片が散乱している。

「少々力押しをさせていただきました」

ベンザ卿の目線に淑やかに答える彼女は笑顔だ。

「ただエンジェルが少々五月蠅かったので、鉄くずにしておきました」

「それは世間ではゴリ押しと呼ばれていて、「少々の力押し」ではないぞ……」

少し照れながら戦火を自慢する彼女。ベンザ卿は彼女の戦闘能力に驚きつつも冷静にボケを処理した。もし彼女の少々の使い方が正しければ、素手で戦艦3隻沈めても多少という言葉で許されるはずだ。

「立てますか」の一言をベンザ卿は右手を挙げて制した。彼女は自分の命を危険に晒してまでも自分を助けにきてくれたのだ。そんな彼女に肩を借りて無様によりよと立ち上がる。そんな無様な姿は見せられなかった。これは単純にプライドの問題だ。足を大地に突き立てベンザ卿はゆっくりと立ち上がり……たかったのだが。

ベンザ卿のその行動を邪魔するかのように炎の壁が十字に切り裂かれ、壁の内側にノアが単騎突入してきた。ノアは左半身を煤まみれにして、かなり憤激している様子だ。そしてマラサイを視界に捉えるなり噛みついた。

「不意打ちを受けたとはいえ、貴様を過小評価していたようだ」

「天界で鬼神と呼ばれた大佐殿とお聞きして楽しみにしていたのに、少し残念でしたわ」

マラサイは妖艶に微笑みを向けたがそれは火に油を注いだようだ。

「まったくその強気がいつまで保てるかな？このまま女に伸されたまま終わっては、私のプライドが許さないんだ。小娘、貴様は生け捕りにして大将、いや変態に引き渡す。そうすれば私の評価も大きく上がるはずだ」

「変態の上官をもつと大変そうですね」

ノアは腰のホルスターから拳銃を抜き、怒りに満ち溢れた銃口をマサライに向けた。素早く引き金を絞り拳銃を連射する。同時にマラサイは地面を手で仰ぐような動作を見せた。

「《赤壁レッドクリフ》」

とたんに地面から溶岩が吹き出し紅蓮に燃え盛る壁を作り上げた。拳銃から放たれた弾は、虚しく赤壁に吸い込まれる。マラサイは壁の向こうでノアが舌打ちをする姿を安易に想像し、思わず笑みが浮かんだ。しかし赤壁が一文字に切り裂かれる。赤く煌々しい光を放つレーザー・ソードを振りかざしながらノアがマラサイに迫った。背中の機械の羽を大きく広げ、背後にいくつもの陽炎をまとい雷撃の如く突撃する。手から数発の火球をはなち牽制を試みたマラサイだが、桁外れの軌道にまったく追いつかない。マラサイの20m手前まで接近した後、ノアが一瞬消えた。そして敵を見失い動揺するマラサイの背後に瞬間移動し、ノアはレーザー・ソードの刃筋を腰まで落とし右足で踏み込みを入れた。強化外骨格で覆われた重い体が地面に沈む。体重を前にかけ刃筋を地面と平行に構えて突き出す。

マラサイがその三段突きを察知いた時には剣先は目と鼻の先まで迫っていた。マラサイは本能的に目をつぶり顔を手で守る。耳を塞ぎたくなるような肉の焼ける音と同時に、熱い液体が全身にかかった。マラサイは恐怖で身を震わせると鼻に肉の焼ける臭いが忍び込

んできた。今の自分の体を想像すると吐き気を催した。マラサイは昔大学で読んだどこかの知識書を思い出した。戦闘時人はアドレナリンが放出されたとえ体の一部が欠損しようとも痛みを感じることが無い場合が多いこと。そして人は体を切断されても数秒は意識があるのだという論文も思い出した。今の自分はどんな醜い姿なのかと、マラサイは今の自分を想像するのが怖かった。

「大丈夫かマラサイ!？」

ベンザ卿の声だった。その低い声に安心感を覚えたマラサイは目を開けて、自分の艶やかな体を見下げた。切り刻まれている箇所も。焼け爛れている痕も無い。しかし全身が血まみれだった。ここで一つ単純に疑問が浮かぶ。自分が無傷ならこの血は誰の物なのかと。マラサイは恐る恐る、視線を声の聞こえた方に向けた。

赤い光線がベンザ卿の左肩を貫いていた。ノアは両手を突き出しベンザ卿に光の刃を突き立て。ベンザ卿はノアの手を両手でしっかりと掴みそれ以上の刃の侵攻を防いでいた。今両者は互いの息がかかるまでの近距離で視線を交わしている。

マラサイは声すら出せずにただ啞然と佇んでいた。あの時油断した自分をいくら責めても責めきれなかった。

「まずは腕一本だ」

ノアは嘲笑を浮かべ刃を返した。ベンザの肉が抉れて、痛々しい音が響く。ノアはのそのままベンザ卿の手をふりほどき、刃を振り切った。

ベンザ卿の左腕が消えた

戦場での再会（後書き）

今週はこれで最後になります。

次の投稿は書き溜めてからになりますので2, 3週間お待ちください。

誤字指摘・評価・感想お待ちしております。

人生最高の1時間5分11秒

ベンザ卿の左腕が宙を舞い、鮮血の雨を降らしながら地面へと投げ出された。

「ベンザ卿っ！！」

マラサイの悲鳴がベンザの耳に届くか届かないかの瞬間には、ベンザ卿は次の動きを始めていた。嘲笑に満ちたノアの顔を右手で鷲掴みにすると大きく後ろに突き飛ばす。ノアは不意を突かれ、大きく体制を崩したが1秒もしないうちに立て直したが1秒では遅かった。ノアの懷に潜り込んだベンザ卿の掌底がノアの体をさらに後ろに吹き飛ばした。ノアは肺の空気をすべて奪われ炎の壁を突き抜けると、そのままクレーターの外周まで飛ばされ、壁に体をめり込ませた。

ノアをブツ飛ばした後、急激に力を使ったベンザ卿はひどく荒い呼吸で咳き込んだ。そんな様子の彼に背中からマラサイが飛びついた。綺麗な顔を涙でグシャグシャにしながら必死にベンザ卿に語りかけてきたが、彼が聞き取れたのは初めの2・3言「ベンザ卿」「腕が」「ごめんなさい」だけで、他は何を言っているのか全く聞き取れなかった。彼女はベンザ卿の胸に顔を押し当てると子供のように泣いた。頬では涙が川となって、ベンザ卿のプレートアーマーに流れ込んでいた。ベンザ卿は残りの腕でマラサイの肩を抱くことしかできない。今の彼女には自分の慰めの言葉は、かえって彼女を傷つけることになると考えていた。

身長差により彼女の頭をただ見つめて立ち尽くしたいたベンザ卿だが、突然の頭痛が彼を襲った。

（私の体でもあるんだ……もっと大切にしてくれ）

以前聞いたことのある声。さきほど気を失っていた時の声だ。ベンザ卿は無意識に頭を押さえていた。そんな彼をマラサイはさらに心配そうに覗いていた。

「俺の勝ちだ」

肩を寄せ合う2人に枯れた声がかけられた。声の主は無論ノアだった。マラサイは彼の姿をみて声を失った。「何故生きていられるのか？」そこまでノアの姿はボロボロだったからだ。体を覆っていた金属と人工筋肉の骨格は半分近く剥がれ落ちており、生身の肉体がむき出しになっている。さらにその肉体も切り傷と打ち身で真っ赤に染まっていた。

「俺の勝利だ」

ノアは亀裂が走った砂時計を天にかかげた。砂時計の砂はもうすぐ尽きようとしていた。

「時間を稼ぐのが俺の任務。貴様の残りの寿命いっぱいのが任務。貴様をこの場に釘付けにして摩天楼に到達させないのが任務。任務。任務。任務……にーんーんむーだああああっっ！！

……」

耳を裂くような絶叫の後、ノアは大の字に後ろに倒れた。ただ目を大きく見開いて、静かに倒れた。まるで寿命を迎えた巨木が倒れ

るかのように静かだった。

「任務……完了」

ノアはただ最後にそう言って目を閉じた。

「私の負けだ」

ベンザ卿は地面に倒れたノアにむけて静かにそう言った。彼を見つめるその眼は「憎き宿敵」や「仇」を見る目ではなく、ただ最高の戦士に向けられる称賛の眼差しだった。

「死んだのですか……？」

「俺は誓いを破らん男だ」

「あなたは最高に甘い男ですね」

ベンザ卿はいまだ無数の《アークエンジェル》が飛び交う大空を仰いだ。

「レギア卿……貴方の好意も無駄になってしまった」

ベンザは腰の剣柄を片手で撫でた。

「陛下……私は生涯の忠誠を誓いながら、あなたの命と国を守れず、奴らを追い払うことすらできませんでした……」

柄を放したその手が左胸に触れた。

「私は1時間5分11秒もの時間を持ちながら、何も守れず、何も変えられなかったのか……！」

ベンザ卿は残った拳をきつく握りしめた。最強の力を手にしても、何もできない自分に腹が立っていた。

「違います、あなたは国を一つを守ったではありませんか！？ それにより多くの命が救われたはずです」

「私が行ったのは国の延命にすぎない……この戦が終われば、天界軍は再び国々を焼き尽くす！！」

優しく声を掛けたマラサイに向けてベンザは怒鳴った。彼女の優しさが、自分のみじめさを際立たせているように思われたからだ。しかしベンザはすぐさま自分が怒鳴ったことを後悔した。

「私はあなたに守られました……私の運命を変えました！！ だから……だからお願いします。何も守れなかった、変えられなかったと御自分を責めないでください」

マラサイは両手で優しくベンザ卿を包み込んだ。「まるで赤子のようだ」と兜の中で苦笑したベンザだったが、自分でも押さえられないものが体の奥から湧き出できて、目から涙がこぼれ落ちた。最後まで背負おうとしていた荷物が少し軽くなったような気がした。

「マラサイ」

「はい」

ベンザ卿の息遣いが兜の隙間から漏れ、マラサイはそれに優しく声を添えた。

「ここまで付き合ってもらったのにこのような結果になってすまない」

「謝るのは私です。あなたを救ったナイト気取りだったのです。その結果、卿の足を引っ張ることになりました」

「何を言っているんだ？ あのままだと私は雪祭りに飾られていたよ」

2人の耳に大小さまざまな足音が聞こえてきた。クレーターの外周でベンザ卿を包囲していた地上部隊が、円を徐々に小さくしていた。マラサイが展開した炎の壁も、じきに突破されるだろう。すなわちこの足音は、戦争は終わりを意味していた。

「あの……ベンザ卿？」

「？」

「その……あなたに、伝えて……おきたいことが、あるんです」

「私もだよ」

「その……えっ!!」

「1時間をありがとう」

ベンザ卿の重みのある、低い声だった。

「そんなお礼なんて……」

「私が言いたかったのはこれだけだ、君の話を聞かせてくれ」

礼を言い終えたベンザはマラサイの瞳を覗いた。するとどうだろうか、マラサイは視線を外して徐々に頬を赤く染めた。

「その……私……貴方のことがっ」

マラサイの顔が熟れた林檎のようになった時だった。体にズシリと重いものが押し掛かった。まるで鉄の塊を抱えているようだ。心

当たり前しかないマラサイは息を呑んで、ノアが落とした砂時計を恐るおそる見た。そこには砂が落ち切った砂時計が虚しく鎮座していた。

人生最高の1時間5分11秒（後書き）

これで第一章は終了です。（章は最近追加しました）

ベンザさんがいなくなつた世界でマラサイはどう動くのか!!

天界軍は人間界を征服してしまうのか!?

それとも……

みなさん、おはこんばんわ!! やもりです。

皆さんの応援のおかげで「1時間5分11秒」も折り返しまで到着できました。

お気に入り登録してくださった10名弱の皆様

この小説をこの話まで読んでくださった読者さま

本当にありがとうございます!! ようやくPVが1万人を突破いたしました。

感謝感謝です!!

これからの展開ですが、新キャラの登場です。

この小説はキャラが少ない方だと思うので、キャラの名前が覚えやすかったと思います。追加で皆様を混乱させないように頑張りたいと思います。

感想、指摘、おまちしています

作者のモチベーションが大幅にアップします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1905s/>

騎士「私の命と引き換えに最強の力をくれ」 悪魔「よし、貴様の残りの寿命

2011年11月13日14時03分発行